

ふるさとの文化財

河北地区文化財保護委員会



河北地区
ふるさとの文化財

資料第一集

発刊のことば

文化は大河のほとりより発祥する、とは、古今の史書の説くところである。

わがふるさとの文化もまた、北上川を母体として創まり培てられた。古来、人々は大河を生活の基盤となし、世の興亡がくりかえされてきたのである。先人が大河を「母なる河」と称し尊崇したゆえんはそこにある。

奇しくもわが河北地区はこの大河の入口(河口)に立地していたがため、古代來の遺跡、遺物、伝説の数が極めて多く、今日なお、文化財の宝庫的觀を呈しているのは地区にとっては幸いであった。古代の桃生柵(城)の事蹟は言うに及ばず、既に県指定をうけている賀茂小銳神社の御神像とか、北上川の河神として意義が深い日高見神社の存在など、その例は枚挙にいとまがないが、いずれも北上川流路の入口を重視しての所産であり、れい明期の人々の繁栄を支障するものとして特筆にあたいしよう。

河北地区に文化財保護委員会が設立されたのが昭和44年の春であった。以来第一段階である地区的資料集収に最大限の努力を続けてきた。この実態調査こそ保護、複元、整理、育成等、広汎にして遠大なる使命の原点となるからである。

ここに3年間の歳月が流れた。

その間には、古碑、仏像等については、もと奥州大学教授司東真雄氏、古墳、古代遺物などについては東北大学名誉教授伊東信雄氏らの直接的指導をうける機に恵まれた。

かくて委員各位の嘗々たる努力の結果、膨大なる資料の集収、整理などができる、かなりの成果を上げることができた。何れも感銘に堪えない。

今回、われわれの集大成を、河北地区「ふるさとの文化財」と題し、資料第一集として編集、発刊する運びとなった。勿論、集収調査はすべてこれを以て完了したのではなく、更に第二集、第三集へと続くのである。本書は整理があらかじめで、体裁も余りよいとは言えない。しかし、内容(物件)そのものは、どれも、史的成は美術的面に於て他地区のそれにくらべ、優るとも劣るものではなく、高く評価されしかるべきと確信する。

本書をひととき、先人の精魂に触れ、息吹きに接することにより、これが精神文化の新しい発見となり、或は郷土の史蹟に対する深い認識となり、ひいては文化財保護なる広汎にして遠大なる使命によせる深い理解となり、更にまた、人類文化の発展に寄与する一資にもならば、委員一同の欣懽これに過ぎるものはない。

末筆ではあるが、御後援を賜わった地区町当局並に教育委員会、物心両面にわたり御協力をいただいた地区内関係各位に対し、深甚の敬意を表し緒言とする。

昭和47年7月

河北地区文化財保護委員長

立花改進

[本書作製者]

河北地区文化財保護委員会

委員長	立花改進	(河)	北)
委員	伊藤泰	(河)	北)
委員	伊藤長敏	(桃)	生)
委員	高橋良記	(桃)	生)
副委員長	武山梅玄	(北)	上)
委員	狩野善夫	(河)	北)
委員	館田虎弥太	(北)	上)
委員	八木斌	(桃)	生)
委員	紫桃正隆	(河)	北)
委員	中島隆男	(北)	上)

編集委員

伊藤長敏
館田虎弥太
紫桃正隆

事務局長

中村英雄(地教委社教主事)

写真

梶原侃(河北町役場)

目 次

発 刊 の こ と ば

口 絵 カ ラ ー 写 真

年 表

桃 生 町 の 部

河 北 町 の 部

北 上 町 の 部

編 集 後 記

上品山より北上川流路をのぞむ



年表

朝代 区分	古		中				後		近世
	姓	名	姓	名	姓	名	姓	名	
古代	姬	少康	嬴	姬	嬴	姬	嬴	嬴	
夏	少	康	姬	少	康	姬	少	康	
商	子	履	姬	子	履	姬	子	履	
周	姬	叔	姬	叔	姬	叔	姬	叔	
春秋	姬	子	姬	子	姬	子	姬	子	
战国	姬	子	姬	子	姬	子	姬	子	
秦	嬴	政	嬴	政	嬴	政	嬴	政	
西汉	劉	邦	劉	邦	劉	邦	劉	邦	
新王莽	新	王	新	王	新	王	新	王	
东汉	劉	秀	劉	秀	劉	秀	劉	秀	
魏	曹	操	曹	操	曹	操	曹	操	
蜀	劉	備	劉	備	劉	備	劉	備	
吳	孫	策	孫	策	孫	策	孫	策	
西晋	晉	惠	晉	惠	晉	惠	晉	惠	
東晋	劉	裕	劉	裕	劉	裕	劉	裕	
宋	劉	義	劉	義	劉	義	劉	義	
齊	劉	紹	劉	紹	劉	紹	劉	紹	
梁	劉	武	劉	武	劉	武	劉	武	
陳	劉	德	劉	德	劉	德	劉	德	
隋	楊	廣	楊	廣	楊	廣	楊	廣	
唐	李	淵	李	淵	李	淵	李	淵	
五代	朱	溫	朱	溫	朱	溫	朱	溫	
宋	趙	匡	趙	匡	趙	匡	趙	匡	
遼	耶	律	耶	律	耶	律	耶	律	
西夏	元	昊	元	昊	元	昊	元	昊	
金	完	朮	完	朮	完	朮	完	朮	
元	忽	必	忽	必	忽	必	忽	必	
明	朱	棣	朱	棣	朱	棣	朱	棣	
清	愛	新	愛	新	愛	新	愛	新	

[吉川弘文館史料]

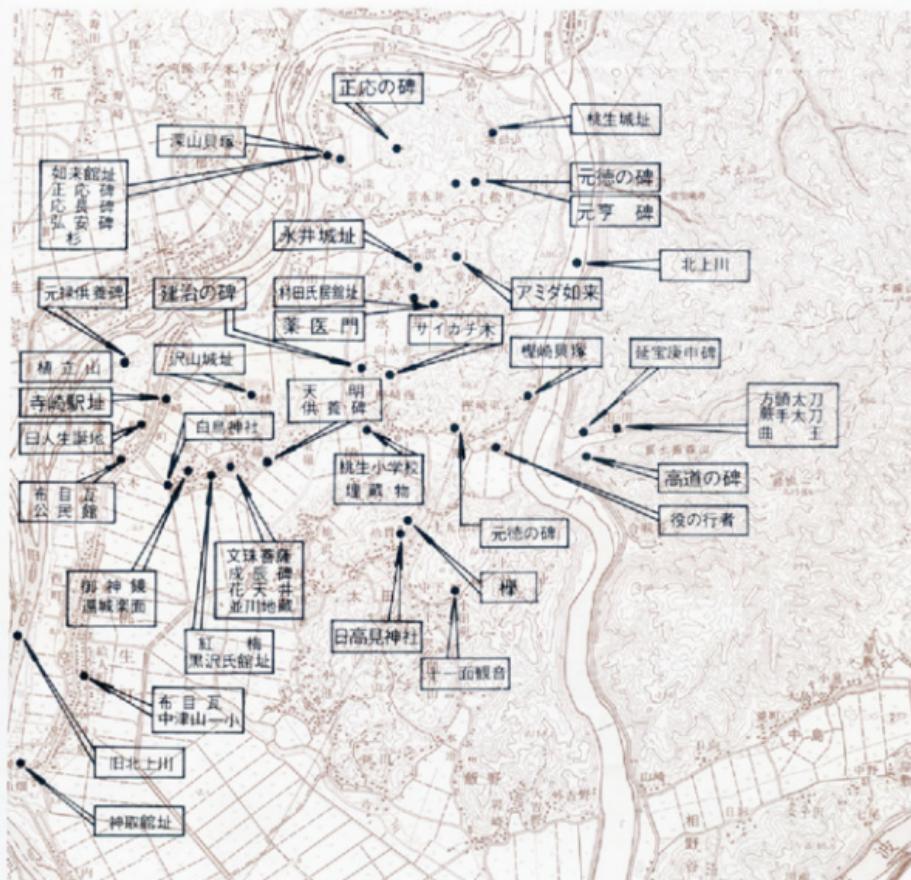
年	号	表	附 年号の読み方
大化 645~649	天 安 857~58	後 和 1012~16	元 末 1118~19
白雉 650~54	貞 規 859~76	寛 德 1017~20	保 宜 1120~23
(白雉 672~85)	元 豪 877~84	安 德 1021~23	治 安 1124~25
朱鳥 686	仁 和 885~88	万 寿 1024~27	大 治 1126~30
天宝 701~03	及 幸 889~97	元 保 1028~38	天 承 1131
麁 704~07	昌 泰 898~900	延 醍 1037~39	承 庚 1132~34
(麁 708~14)	音 901~23	延 久 1040~37	保 延 1135~40
和銅 715~16	延 923~30	延 德 1044~45	治 木 1141
重 715~23	承 平 931~37	承 仁 1046~52	廉 由 1142~43
夷老 717~23	承 幸 931~37	承 保 1046~52	廉 由 1142~43
神龟 724~28	天 優 938~46	天 保 1053~57	天 美 1144
天平 729~48	天 勤 947~56	天 幸 1058~64	天 安 1145~50
天平 749~56	天 德 957~60	天 肇 1065~68	天 平 1151~53
天平勝宝 757~64	天 定 961~63	天 久 1069~73	天 寿 1154~55
天平神護 765~66	天 保 964~67	天 保 1074~76	天 保 1156~58
神護景雲 767~69	天 仁 968~70	天 仁 1077~80	平 仁 1159
天平寶曆 770~80	天 延 973~75	天 德 1084~86	天 保 1161~62
天平 781~78	天 元 976~77	天 治 1087~95	天 夏 1163~64
天平 782~805	天 元 978~82	天 保 1094~95	天 万 1165
天平 805~86	天 元 983~84	天 長 1096~07	仁 安 1166~68
弘仁 810~23	天 元 985~86	天 德 1097~98	仁 延 1169~70
天正 824~33	天 元 987~88	天 保 1100~1103	承 安 1171~74
天和 834~47	天 元 990~94	天 治 1104~05	寛 貞 1175~76
嘉祥 848~50	天 元 995~98	天 保 1106~07	治 安 1177~80
仁和 851~53	天 元 999~1002	天 保 1110~12	(天 安)
齐衡 854~56	天 元 1004~11	天 保 1113~17	寿 水 1182~84
元 諱 1184	正 喜 1257~58	平 仁 1346~69	(江 戸) 文 化 1804~1
文治 1185~89	正 元 1259	德 1376~71	元 政 1818~26
建久 1190~98	正 安 1260	永 1394~1427	保 仁 1830~43
正治 1199~1209	正 德 1275~76	長 1428	和 仁 1844~47
建仁 1201~03	正 保 1284~74	天 授 1275~80	化 仁 1844~47
元祐 1204~05	正 前 1284~92	永 安 1429~40	治 仁 1844~59
建永 1206	正 安 1278~87	德 家 1449~51	承 延 1860
永元 1207~10	正 宽 1288~92	治 家 1452~54	明 治 1855~63
建財 1211~12	正 宽 1293~98	正 家 1453~56	万 治 1868~60
建保 1213~18	正 安 1299~01	正 仁 1455~57	治 仁 1864~67
承永 1219~21	正 元 1302	正 仁 1457~59	文 1661~72
貞定 1222~23	正 乾 1303~05	正 仁 1458~61	慶 宝 1673~70 (道 代)
元祐 1224	正 保 1304~44	正 仁 1467~68	明 治 1868~1912
嘉祐 1225~26	正 宽 1308~10	正 仁 1469~86	正 仁 1912~26
安貞 1227~28	正 仁 1312~16	正 仁 1470~86	昭 和 1920~
正保 1229~31	正 保 1313~16	正 仁 1471~86	昭和 1920~
正保 1230~32	正 保 1317~18	正 仁 1472~86	昭和 1920~
天祐 1233~34	正 仁 1319~20	正 仁 1473~86	昭和 1920~
正保 1234~35	正 仁 1321~23	正 仁 1474~86	昭和 1920~
正保 1235~37	正 仁 1324~25	正 仁 1475~86	昭和 1920~
正保 1238~39	正 仁 1326~28	正 仁 1476~86	昭和 1920~
正保 1239~40	正 仁 1329~30	正 仁 1477~86	昭和 1920~
正保 1240~42	正 仁 1331~33	正 仁 1478~86	昭和 1920~
正元 1243~46	正 仁 1334~36	正 仁 1479~86	昭和 1920~
正保 1244~48	正 仁 1335~38	正 仁 1480~86	昭和 1920~
正保 1249~55	正 仁 1336~39	正 仁 1481~86	昭和 1920~
正元 1250~56	正 仁 1340~45	正 仁 1482~86	昭和 1920~
正保 1251~57	正 仁 1341~46	正 仁 1483~86	昭和 1920~
正保 1252~58	正 仁 1342~47	正 仁 1484~86	昭和 1920~
正保 1253~59	正 仁 1343~48	正 仁 1485~86	昭和 1920~
正保 1254~60	正 仁 1344~49	正 仁 1486~86	昭和 1920~
正保 1255~61	正 仁 1345~50	正 仁 1487~86	昭和 1920~
正保 1256~62	正 仁 1346~51	正 仁 1488~86	昭和 1920~
正保 1257~63	正 仁 1347~52	正 仁 1489~86	昭和 1920~
正保 1258~64	正 仁 1348~53	正 仁 1490~86	昭和 1920~
正保 1259~65	正 仁 1349~54	正 仁 1491~86	昭和 1920~
正保 1260~66	正 仁 1350~55	正 仁 1492~86	昭和 1920~
正保 1261~67	正 仁 1351~56	正 仁 1493~86	昭和 1920~
正保 1262~68	正 仁 1352~57	正 仁 1494~86	昭和 1920~
正保 1263~69	正 仁 1353~58	正 仁 1495~86	昭和 1920~
正保 1264~70	正 仁 1354~59	正 仁 1496~86	昭和 1920~
正保 1265~71	正 仁 1355~60	正 仁 1497~86	昭和 1920~
正保 1266~72	正 仁 1356~61	正 仁 1498~86	昭和 1920~
正保 1267~73	正 仁 1357~62	正 仁 1499~86	昭和 1920~
正保 1268~74	正 仁 1358~63	正 仁 1500~86	昭和 1920~
正保 1269~75	正 仁 1359~64	正 仁 1501~86	昭和 1920~
正保 1270~76	正 仁 1360~65	正 仁 1502~86	昭和 1920~
正保 1271~77	正 仁 1361~66	正 仁 1503~86	昭和 1920~
正保 1272~78	正 仁 1362~67	正 仁 1504~86	昭和 1920~
正保 1273~79	正 仁 1363~68	正 仁 1505~86	昭和 1920~
正保 1274~80	正 仁 1364~69	正 仁 1506~86	昭和 1920~
正保 1275~81	正 仁 1365~70	正 仁 1507~86	昭和 1920~
正保 1276~82	正 仁 1366~71	正 仁 1508~86	昭和 1920~
正保 1277~83	正 仁 1367~72	正 仁 1509~86	昭和 1920~
正保 1278~84	正 仁 1368~73	正 仁 1510~86	昭和 1920~
正保 1279~85	正 仁 1369~74	正 仁 1511~86	昭和 1920~
正保 1280~86	正 仁 1370~75	正 仁 1512~86	昭和 1920~
正保 1281~87	正 仁 1371~76	正 仁 1513~86	昭和 1920~
正保 1282~88	正 仁 1372~77	正 仁 1514~86	昭和 1920~
正保 1283~89	正 仁 1373~78	正 仁 1515~86	昭和 1920~
正保 1284~90	正 仁 1374~79	正 仁 1516~86	昭和 1920~
正保 1285~91	正 仁 1375~80	正 仁 1517~86	昭和 1920~
正保 1286~92	正 仁 1376~81	正 仁 1518~86	昭和 1920~
正保 1287~93	正 仁 1377~82	正 仁 1519~86	昭和 1920~
正保 1288~94	正 仁 1378~83	正 仁 1520~86	昭和 1920~
正保 1289~95	正 仁 1379~84	正 仁 1521~86	昭和 1920~
正保 1290~96	正 仁 1380~85	正 仁 1522~86	昭和 1920~
正保 1291~97	正 仁 1381~86	正 仁 1523~86	昭和 1920~
正保 1292~98	正 仁 1382~87	正 仁 1524~86	昭和 1920~
正保 1293~99	正 仁 1383~88	正 仁 1525~86	昭和 1920~
正保 1294~100	正 仁 1384~89	正 仁 1526~86	昭和 1920~
正保 1295~101	正 仁 1385~90	正 仁 1527~86	昭和 1920~
正保 1296~102	正 仁 1386~91	正 仁 1528~86	昭和 1920~
正保 1297~103	正 仁 1387~92	正 仁 1529~86	昭和 1920~
正保 1298~104	正 仁 1388~93	正 仁 1530~86	昭和 1920~
正保 1299~105	正 仁 1389~94	正 仁 1531~86	昭和 1920~
正保 1300~106	正 仁 1390~95	正 仁 1532~86	昭和 1920~
正保 1301~107	正 仁 1391~96	正 仁 1533~86	昭和 1920~
正保 1302~108	正 仁 1392~97	正 仁 1534~86	昭和 1920~
正保 1303~109	正 仁 1393~98	正 仁 1535~86	昭和 1920~
正保 1304~110	正 仁 1394~99	正 仁 1536~86	昭和 1920~
正保 1305~111	正 仁 1395~100	正 仁 1537~86	昭和 1920~
正保 1306~112	正 仁 1396~101	正 仁 1538~86	昭和 1920~
正保 1307~113	正 仁 1397~102	正 仁 1539~86	昭和 1920~
正保 1308~114	正 仁 1398~103	正 仁 1540~86	昭和 1920~
正保 1309~115	正 仁 1399~104	正 仁 1541~86	昭和 1920~
正保 1310~116	正 仁 1400~105	正 仁 1542~86	昭和 1920~
正保 1311~117	正 仁 1401~106	正 仁 1543~86	昭和 1920~
正保 1312~118	正 仁 1402~107	正 仁 1544~86	昭和 1920~
正保 1313~119	正 仁 1403~108	正 仁 1545~86	昭和 1920~
正保 1314~120	正 仁 1404~109	正 仁 1546~86	昭和 1920~
正保 1315~121	正 仁 1405~110	正 仁 1547~86	昭和 1920~
正保 1316~122	正 仁 1406~111	正 仁 1548~86	昭和 1920~
正保 1317~123	正 仁 1407~112	正 仁 1549~86	昭和 1920~
正保 1318~124	正 仁 1408~113	正 仁 1550~86	昭和 1920~
正保 1319~125	正 仁 1409~114	正 仁 1551~86	昭和 1920~
正保 1320~126	正 仁 1410~115	正 仁 1552~86	昭和 1920~
正保 1321~127	正 仁 1411~116	正 仁 1553~86	昭和 1920~
正保 1322~128	正 仁 1412~117	正 仁 1554~86	昭和 1920~
正保 1323~129	正 仁 1413~118	正 仁 1555~86	昭和 1920~
正保 1324~130	正 仁 1414~119	正 仁 1556~86	昭和 1920~
正保 1325~131	正 仁 1415~120	正 仁 1557~86	昭和 1920~
正保 1326~132	正 仁 1416~121	正 仁 1558~86	昭和 1920~
正保 1327~133	正 仁 1417~122	正 仁 1559~86	昭和 1920~
正保 1328~134	正 仁 1418~123	正 仁 1560~86	昭和 1920~
正保 1329~135	正 仁 1419~124	正 仁 1561~86	昭和 1920~
正保 1330~136	正 仁 1420~125	正 仁 1562~86	昭和 1920~
正保 1331~137	正 仁 1421~126	正 仁 1563~86	昭和 1920~
正保 1332~138	正 仁 1422~127	正 仁 1564~86	昭和 1920~
正保 1333~139	正 仁 1423~128	正 仁 1565~86	昭和 1920~
正保 1334~140	正 仁 1424~129	正 仁 1566~86	昭和 1920~
正保 1335~141	正 仁 1425~130	正 仁 1567~86	昭和 1920~
正保 1336~142	正 仁 1426~131	正 仁 1568~86	昭和 1920~
正保 1337~143	正 仁 1427~132	正 仁 1569~86	昭和 1920~
正保 1338~144	正 仁 1428~133	正 仁 1570~86	昭和 1920~
正保 1339~145	正 仁 1429~134	正 仁 1571~86	昭和 1920~
正保 1340~146	正 仁 1430~135	正 仁 1572~86	昭和 1920~
正保 1341~147	正 仁 1431~136	正 仁 1573~86	昭和 1920~
正保 1342~148	正 仁 1432~137	正 仁 1574~86	昭和 1920~
正保 1343~149	正 仁 1433~138	正 仁 1575~86	昭和 1920~
正保 1344~150	正 仁 1434~139	正 仁 1576~86	昭和 1920~
正保 1345~151	正 仁 1435~140	正 仁 1577~86	昭和 1920~
正保 1346~152	正 仁 1436~141	正 仁 1578~86	昭

桃生町の部

神	社	13	
古	城 館	址	17
古	碑, 墓	碑	25
神	像, 佛	像	37
貝	塚	塚	43
埋	藏 遺	物	45
建	築	築	51
無	形 文 化	財	52
古	木	55
交	通 史	跡	57
旧	跡	58
自	然	59

註 位置を表わす「町の北約〇〇km」或は「町の南
約△km」は、それぞれの町役場の所在地を基点
としての距離です。

桃生町の文化財



日高見神社

位 置 桃生町太田十貫（旧桃生村），町の東約3km

由 緒 延喜式内社 桃生六座の一

設 置 平安時代（780年頃）

概 説 古代の山岳信仰に由来する神である。奈良時代に此地方に桃生城が設置された。宝亀5年（774年）蝦夷叛乱し城の西郭が敗られたとき、桃生日河の郡神に祈願して囲をつえることが出来たと国史にあり、靈験あらたかな神であった。

延暦21年に正五位上、勅五等、更に貞觀元年に從四位下に叙されている。

北上川の水神を祭った神である。延長5年に式内社即ち國幣社に列せられた。

鎌倉初期、文治5年に源頼朝が平泉の藤原氏討伐後、弟・牛若丸（義經）の菩提の為に、神社の境内に、應那王山・長谷寺を建立。大和の長谷寺から木造十一面観音を移来し、本堂・大悲閣に安置したという。かくて神社と寺が隣合せになったので、室町時代になると、神仏混淆思想から、十一

面観音を日高見明神の本地仏とし、御神体と誤認されるようになった。永正8年の葛西・首藤の合戦のとき、兵火で神社も大悲閣も焼失し、十一面観音が粉失してしまった。

その後、神社は再建されず、観音堂が建てられ、代りの観音を安置し、神社の祭りを続けて来たという。

社殿が再建されたのは宝永年間（1704—10年）現社殿は昭和45年に新築。天照大神、日本武尊、武内宿弥の三神が合祀されている。社家大和氏の家系は、44代、900年間も神に奉仕して來た古い家柄である。

(註) 牡鹿郡給分浜に祀られてある国宝十一面観音は、古く日高見神社の本地仏とされたものを、中世に移されたとの説もある。



日高見神社（桃生町太田）



日高見神社拝殿 (桃生町太田)

白鳥神社

位 置 桃生町域内館下(旧中津山村), 町の東約1km
由 緒 中津山郷總鎮守社
設 置 室町時代, 応永20年頃 (1413年)

あどりの
概 説 熱田神宮の末社, 小銘白鳥神社という。勅請年代は不詳だが, 古くから神祠が建っていたという。応永年間に、修驗華嚴有應法印が、ここに神殿を創建し、御神像を安置し、神社の傍らに安祥寺という加持折持の道場を建てて住居し、その子孫が代々神官として幕末の大庭正夫氏まで、23世 450年間も神社に奉仕して来た。

江戸時代の寛文11年(1671年)に、中津山領主・

なみのうえかげ重き
瀬上景姓が夢に感じ社殿を造営し、享保年間に領主・黒沢後榮が境内を整備して、現在の規模の神社となった。嘗ては御鳥居前に、五代藩主・伊達吉村公が、享保10年(1725年)に、自ら繩張りして構築した樹形があつたが、道路改修の為に壊され、今は西の一角に馬立のみ残っている。
神鏡と還城楽の假面が社宝としてある。





白鳥神社拝殿 (桃生町域内)



白鳥神社神殿 (桃生町域内)



白鳥神社御神鏡 (桃生町域内)

御神鏡

ゆのうじんかがね
概説 領主・瀬上景姓が神社の社殿を改築したあと、
御神鏡を延宝9年(1681年)に奉納したものである。
鏡直經不詳。鏡の正面に「白鳥大明神御靈前」右側に「奉獻」左側に、「延宝九年二月、瀬上景姓」と銘が彫られてある。郷土資料として貴重なものである。



還城楽の仮面 (白鳥神社) (桃生町域内)

還城楽の仮面

がんじょうらくのかめん
概説 雅楽の環城楽仮面と云う。面の高19cm、面の巾15cm、両眼も歯も薄い赤銅で被覆されていたが、歯は殆ど剝離して一部分残っているに過ぎない。眉毛、髪は全部脱落している。後世に彩色したもの。

- 製作年代 江戸初期
- 作者不明 社記に「文治五年頼朝奉獻」とある。

桃 生 城 址

位 置 桃生町裏永井(旧桃生村)、町の東北約5km
郡境の茶臼山

概 説 明治初頃、熊谷真弓氏が町の北端の茶臼山を、桃生城址と想定してから、ここが桃生柵址と謂われて来た。山頂には三段の土壠があり、その東の嶺続きの山には、100m平方の平坦地があり土壠が廻らされてある。茶臼山は159mの高峯、東と北の山腹は急峻で数条の段階が廻っている。北上の清流が山裾を奔流し、山頂は眺望雄大で、北上山脈の山並みと、広漠たる北上平野を、「跨大河凌峻嶺」の古記に取めることが出来る。

あてはまる。

桃生柵は天平宝字4年(760年)に完工。3年の歳月と8千人の労力を使役して築城された。然し柵内に1千戸の柵戸と、多勢の兵士を駐屯させ、辺境の防備と地方開発の拠点としては相応しくない。その上、山の附近から、奈良時代の布目瓦や、須恵器の破片などが発見されない点からも、最近、疑問が持たれるようになり調査中である。

前方の山は桃生城址、遠い方の山は対岸の北上山脈の山々



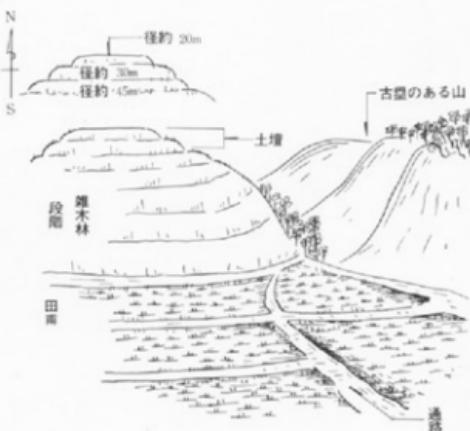
桃生城址全景 (桃生町と津山町境)



桃生城址（桃生町と津山町境）

茶臼山のチャシ址(砦址)

概説 茶臼山々頂の土壙は、自然の山頂を削って造った三つ重ねのお供餅の形をしている。雜木林に掩われて判然しないが、上壙の直径は20mばかり、各段の土壙には土塁も空塗も無い。北海道には、網走の桂ヶ岡チャシや、釧路の鶴ヶ岱チャシ、モリヤのチャランケチャシ等が史蹟に指定されている。いづれも断崖のある丘に、三つ重ねのお供餅の形で、茶臼山の土壙と同じである。茶臼山の茶臼という言葉はアイヌのチャシから転訛したものだといふ。恐らく7—8世紀頃の先住民達が築いたものと思う。チャシとは砦の意味。



茶臼山のチャシ址桃生城址

永井城址

位置 桃生町表永井（旧桃生町），町の東北約4km

概説 鎌倉時代の初期、文治5年(1189年)源頼朝の奥州東征後、戦功により山内首藤經俊が桃生二十四郷を拝領して此に居城した。永井城は標高50mの永井丘陵にあり、本丸、二の丸、三の丸、才一控丸、才二控丸の5郭よりなり、堅城を誇ったが、室町期に南方に勢力を伸ばして大森城に移り、重臣・畠崎内膳に永井城を守らせた。明応8年、葛西宗清の臣・門田丹波・勝田某ら宗清謀殺をはかりしが、陰謀露見し、門田らは逃げて永井城に入った。門田らの引渡しを、畠崎氏に要求したが応じなかったので、葛西宗清は永正8年(1511年)兵

を発して城を包囲し、伊達稙宗の応援を得て、城を陥ることが出来たという。以後は葛西氏の領地となった。永井城は各郭とも800余坪の面積を有し、本丸の西方二の丸の間には丈余の絶壁と空堀があり、二の丸と三の丸の間も絶壁で界している。更に東方は空堀を界にして、400坪内外の才一控丸、その東方は丈余の空堀を界に、才二控丸がある。今は八雲神社が祀られ、社地の周囲には、二重の空堀が現存している。最近の開田ブームで殆ど崩され、昔の雰囲が感じられない。

永井城址全景 (桃生町表永井)



左から山頂に三ノ丸（鰐音山）
二ノ丸、本丸、才一控丸、才二控丸
(八雲神社) と並んでいる。

永井城址 (本丸) (桃生町表永井)



村田氏居館址

位置 前と同じ

概説 居館は永井丘陵の麓、高さ20m程の丘の上にあり、一部石垣を廻らし、永井城の1郭をなしている。約800坪の屋敷内には、柴垣を廻らした住宅が建っていて、館の面影を留めている。村田氏は上野国小山城主・小山朝政の嫡流、嘉吉9年(1441年)の結城の乱に破れて、所領栗田郡村田庄に

移り、村田氏を称した。のち伊達家に住んだが、天正19年(1591年)村田万好斎宗頼が、故あって、村田三万石を没収され、桃生永井に移され明治維新に至る。村田家は仙台藩御一家の格式で、宗頼は伊達植宗の九男にあたる。



村田氏居館址 (桃生町表永井)



村田氏居館址

(桃生町表永井)

沢山城址

位置 桃生町寺崎八幡山(旧中津山村), 町の東北
約1.5km

概説 鎌倉時代は西条氏、室町末期からは寺崎氏の居城。城址は八幡神社の東に続く沢山間にあり、開墾されて畠地となり、土塁などは判らないが、山の北側に急傾斜の段階が残っている。恐らく八幡山全体が城地で、神社のある高台や、西の杉林の平地が、城郭の中心と思う。古誌に「沢山城は西条栄如居館」とあるが、室町期に至る300年間の消息はわからない。永正8年(1511年)の永正合戦の時に、西条光国という者が、葛西氏の陣営に参加しているし、葛西家臣列の項に、西条栄加が寺崎邑主として載せてある。首藤氏滅亡後、葛西2世清親の末子・寺崎彦九郎清次の5代の孫、次郎左衛門清義がこの地に封ぜられ、桃生北方の抑えとして置かれた。その後、10代の刑部大輔常清のとき、磐井郡流莊に移り、常清の一族が沢山城に留まった。天正18年(1590年)当主伊予守祐光が深谷の陣に討死して、城は廃墟となった。

(註) 常清の甥・明義の子孫からは、伊達藩儒者大槻平泉、磐溪、文彦博士や、蘭医大槻玄沢などの名士が輩出している。



沢山城址 (桃生町寺崎)

神取館址

位置 桃生町神取（旧中津山村），町の西約4km

概説 館址は神取山の林昌院の裏山にある。天保3年（1832年）北上川大改修工事のため、山の西侧が大部分削り取られて断崖となり、館の各部の界が判然しないが、山中に土壘と空堀の一部が現存している。いまは大部分が墓地となっている。旧記に「葛西

家臣・鈴木山城の居館」と記してある。

天正18年（1590年）葛西氏滅亡のとき、深谷の陣の才2陣として、大原飛彈守、奥玉胤時ら1700騎が、此の山に陣を布いたと謂われている。但し戦は行われなかったという。



神取館址（桃生町神取）



神取館址（本丸）（桃生町神取）

黒沢氏居館址

位置 桃生町域内館下(旧中津山村)、町の東約1km

概説 居館址は城内の細長い丘陵の上にあり、室町時代に中津山氏が居城した大館城の1郭に当り、御館（紅梅館）と謂われている。屋敷は方1丁、昔の豪華な館の建物も追手門も、明治初年に焼失してから畠地と化し、紅梅の老木と物見櫓のあった高台のみ、僅かに昔の雰を留めている。館の近くに矢の目という部落がある。ここは名取郡矢の目足軽20人が、黒沢家の御子け足軽として置かれた所である。享保8年(1723年)に、黒沢俊栄が中津山三千石の領主となってから。その子孫が明治維新迄、7代、150年間住んでいた。



黒沢氏居館址 (桃生町域内)

如來館址

位 置 桃生町牛田（旧桃生村），町の東北約3km

概 説 館址は牛田の北上川自然堤防に続く、低い丘陵上に見られる平山型式の中世の館址である。古記に「館址は東西16間、南北32間、葛西伝益入道居城」とあり、館址の一部に3重の濠が現存している。室町期の永正8年（1511年）から葛西氏滅亡の天正18年（1590年）まで、葛西氏の居城であったという。

（附）館山附近遺跡

概 説 この館山附近一帯に、縄文晩期から奈良時代にかけて、遺物が埋蔵されている。館山の北端には縄文後期から晩期にかけての深山貝塚もある。未だ充分調査されていないが、先日、調査の折に須恵器の破片と、軍防令に載せてある軍陣用の磨石の1片が発見された。この一帯には先住民の住居跡、堅穴もあると推定される。

如來館址（入 口）（桃生町牛田）



如來館址（入 口）（桃生町牛田）



古碑、墓碑

じょう かん 貞觀の碑

位置 桃生町山田（旧桃生村）、町の東約5km

概説 最近、山田山の丘陵が切削され、[高道45号線]が構築されたので、古碑のある丘は新河岸に孤立してしまった。この碑は碑高113cm、巾31cm、重量感のある自然石で、正面上段に「高道」、左側に「墓」、左側下に「貞觀五年五月（863年）」と刻まれてある。昔から仙台領3古碑の一といわれ、貞享3年（1686年）に遊佐木斎が初見し、享保4年（1719年）に佐久間洞巖が奥羽観勝聞老誌で発表してから有名になった。最近、岩手奥州大学の司東教授が調査

された。「墓」と「貞觀五年五月」の文字は後世の追刻とみた。碑は初め、「高道墓」とのみ彫られてあったものが、山田部落の高道伝説を、後世に伝えるために、碑の正面下畔に「貞觀五年五月日」と一行に彫ったのだが、長い年月の間に、文字が消滅したので、碑の側面に「貞觀五年五月」と刻み、更に右角に「墓」と刻み替え、一行の文字が三回に亘り、刻み場所が変わったもの。ただ高道の二字は素朴な地方人の彫り、時代は余り下らないと見ている。坂上大沼称高道と肩書が無いので問題の碑となつたという。

(註) 国史によれば、高道というのは坂上田村麿將軍の才11子、天安2年（858年）に從五位下、陸奥介として陸奥の国府に下向し、貞觀元年（859年）に鎮守府將軍となり、翌2年に上総權介に転任した歴史上の人物である。



貞觀の碑（桃生町山田）





建治の碑（桃生町向永井）

建治の碑

位置 桃生町向永井（旧桃生村），町の東約3km

概説 向永井八幡の澤美氏の屋敷内にたっている。この碑は高さ83cm，巾39cm，碑の上面に、弥陀三尊の梵字を彫った供養碑である。

「建治二年十一月十九日」(1275年)と刻まれてある。

弘安の碑（桃生町牛田）



弘安の碑

位置 桃生町牛田（旧桃生村），町の東北約3km

概説 牛田の五十鈴神社の境内にある。

碑の高さ135cm，巾74cm，苔が厚くついているので文字はよく見えない。

大日如来碑ともいう。「安永お書上」に「古碑，大日如来碑，弘安九年三月八日(1286年)高四尺，巾二尺五寸」と書いてある。



正応の碑（その1）（桃生町牛田）

正応の碑その1

位 置 桃生町牛田（旧桃生村）、町の東北約3km

概 説 牛田の如来館山入口の高台の墓地にある。碑の上面に弥陀三尊の梵字が彫られてある。碑の高さ95cm、巾37cm、正応三年十月七日（1290年）と刻まれた供養碑である。



正応の碑（その2）（桃生町倉持）

正応の碑その2

位 置 桃生町倉持（旧桃生村）、町の東北約4km

概 説 倉持の大通寺の墓地にある。もとは牛田如来の西条均氏屋敷内の土中に埋ってあった。近年、同家に災禍がつづくので、祈祷師に占ってもらい、そのお告げにより、この碑が母家の土台の下、深く土中に埋まっていたのを発掘し、寺の墓地に厚く祀ったという。碑の高さは80cm、巾130cm、正応四年十一月十四日（1291年）と刻まれてある。



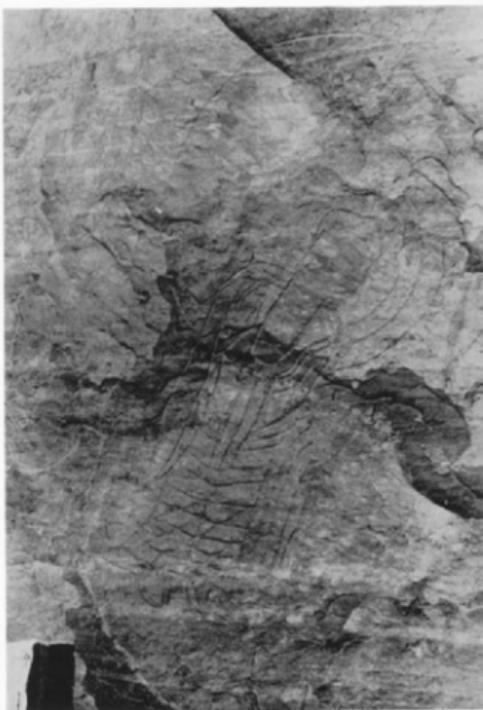
応長の碑 (桃生町牛田)

応長の碑

位 置 桃生町牛田（旧桃生村），町の東北約3km

概 説 牛田の五十鈴神社の境内に建っている。碑の高さ96cm、巾76cmあり、碑面に線刻で弥陀三尊像が彫かれているが、素人の作で絵像が判然としない。「応長二年壬子正月廿」(1312年)と刻まれてある。線刻弥陀三尊像の碑という。絵像の古碑は珍らしい。

(註) 歴史考古資料として町文化財に指定。



げんこう
元亨の碑

位置 桃生町裏永井(旧桃生村), 町の東北約4.5km

概説 裏永井の台の高橋一雄氏の屋敷外の山林の中に建てる。碑面の上部に弥陀三尊の梵字が刻まれ「元亨二年甲子十九日」(1324年)とあり、その他の文字も鮮明に彫られてある。碑高180cm, 幅100cm。



元亨の碑 桃生町裏永井)

元徳碑（その1）

位置 桃生町裏永井（旧桃生村），町の東北約4.5km

概説 永井台の高橋氏の屋敷内にあり，碑の上部が欠け，仏（南無阿弥陀仏の仏）の1字が刻まれてある断碑。元徳三年二月（1331年）と彫ってある。碑の高さ66cm，巾48cmあり。

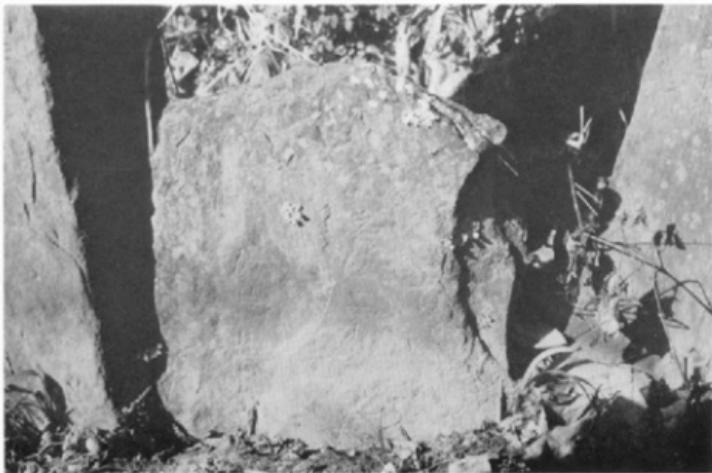


元徳の碑（その1）（桃生町裏永井）

元徳の碑（その2）

位置 桃生町檍崎（旧桃生村），町の東方2.5km

概説 檍崎の妙円寺境内の古碑群の中に建ててある。碑の高さ55cm，巾42cmの断碑で，元徳二年（1330年）と刻まれてある。



元徳の碑（その2）（桃生町檍崎）

古碑群その1

位置 桃生町樺崎(旧桃生村), 町の東約4km

概説 妙円寺境内の西山麓にあり。年号は前掲の元徳の碑外に、応安、康暦、永和などの、室町期の古碑が16基並んである。これらの古碑は樺崎の出雲神社の奥の方の窪地の墓地にあったものを、後世になって、寺内的一角に集めたものという。

古碑群その3

位置 前と同じ

概説 大通寺本堂の裏に、古碑に追刻したものが多數ある。明応3年の碑に天保の追刻したもの。其他は室町期の古碑に、寛文11年、元禄元年、万治3年、貞享5年などと、追刻した古碑が5、6基ある。

古碑群その2

位置 桃生町倉崎(旧桃生村), 町の東北約4km

概説 大通寺の裏山の墓地に、約10基ほど放置されている。牛田の如来館山にあったものを移したものという。正応4年の古碑の外は、室町期の古碑群である。



古碑群(妙円寺) (桃生町樺崎)

古碑群その4

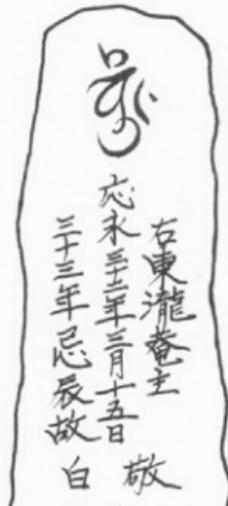
位 置 桃生町牛田（旧桃生村）、町の東北約3km

概 説 館山の南端の丘に五十鈴神社が祀られてある。その境内に、先掲の弘安碑、正応碑、応長碑の他に、応永碑、カムマム（不動種子）の碑など数基が建っている。また、現在大通寺墓地に移された、正応4年の碑の外、室町時代の古碑16基と、古碑に追刻した碑、5、6基も、この館山附近に散在していた古碑という。この館山附近は、奈良・平安時代から、中世にかけて人々が群住し、この地点が北上川の流路の拠点として、繁昌した場所であろう。

カムマムの碑（桃生町牛田）



応永の碑（桃生町牛田）



板碑（アムク）

こうしん
庚申供養碑

位 置 桃生町山田（旧桃生村）、町の東約5km

概 説 山田部落の入口で山裾に建つてある。碑の高さ150cm、巾147cmの庚申塔で、「延宝八庚申年庚申四月朔日」（1680年）と刻まれてある。碑の下面に、高橋与右エ門、同久右エ門、三浦弥七郎、同茂左エ門、千葉縫殿助など14名の姓名が彫られてある。恐らく侍の子孫で、帰農した人達の建てた供養塔と思う。

（註）これは此地方の最古の庚申碑で、民俗資料として貴重なもの、町文化財指定。



庚申供養碑（桃生町山田）



成辰の碑

位置 桃生町域内西崖(旧中津山村)、町の東約1km

概説 香積寺の境内左側に建つてある。

碑の高さ174cm、巾137cmの大きな板碑で、明治23年7月25日(1890年)に旧黒沢氏の家臣、綿野彦四郎並に旧臣達一同が建てた供養碑で、正しくは「成辰役当藩戦歿記念碑」という。成辰戦争の事が記されている。

明治成辰の役に、藩命により、黒沢俊親が隊長となり、家臣80余人と、本藩直參の士からなる、才二大隊を編成して越後口に出陣した。長岡藩救援のためである。慶応4年7月24日(1868年)仙台・会津・米沢の三藩兵が合同して、官軍の挺る越後の古志郡土ヶ谷の堀を襲撃し、長岡の執政、河井龍之助の長岡城奪還に協力、大戦功をあげた記録が記されている。成辰戦争に於ける、仙台藩唯一の戦勝記念碑。戦死者、八木高明、鈴木惣兵工、和歌山糸之助、鈴木昌之助、外に仙台藩士吾妻敬三郎、平渡清太夫の氏名が刻まれている。



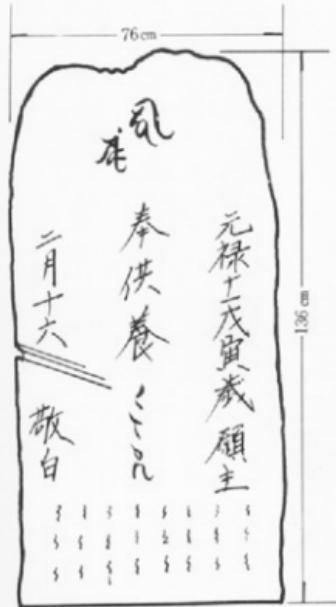
成辰の碑 (桃生町域内)

元禄供養碑

位 置 桃生町寺崎八木(旧中津山村)，町の中心部

概 説 碑は町裏十兵衛蘭土にあり、高さ136cm、巾76cm
上面に梵字、下に「奉供養」、両側に「元禄十一
成寅歲二月十六」と刻まれてある。以前は内土手
に仰けに倒れていた。今も右脇腹に刀痕のような
新込みがあるが、それは次のような騒動の名残り
だと古老が語り伝える。その頃、町裏にお化が出
るという噂で里人がおののいていた。中津山の修
驗・大館淹本坊という剣の達人が、これを聞き、物
陰にかくれて、お化に斬りかけると姿は消えた。

翌朝見ると、墓のあたり一帯に血が流れている。血
筋を辿って行くと、蘭土前に、血潮にそまったく碑が
倒れていたという怪談話がある。この供養碑は元
禄年間、故あって焚殺された座頭数人のために、佐
藤十兵衛が主となって建てたという。ここに十兵衛
の家族の墓があり、調査で隠キリシタン墓とわかつた。
焼殺された座頭もキリシタン信者と思う。
怪談の真相はこの辺にあったのかもしれない。



元禄供養碑 (桃生町寺崎外八木)

天明の餓死者の供養碑

位 置 桃生町域内西嶺(旧中津山村), 町の東約1km

概 説 香積寺の旧境内、荷包にあり。天明の大饑饉のときの、餓死者の冥福を祈るために、香積寺15世演乘和尚が、寛政5年8月24日(1793年)、経文の1字を1石毎に刻み、土中に埋め供養碑を建てたものという。碑の高さ150cm、巾90cm、寺崎町の慈善家渥美彦七の寄進によるものである。



天明餓死者供養碑 (桃生町域内西嶺)



神像, 仏像

白鳥神社御神像

位置 桃生町域内（旧中津山村）、町の東1km

概説 白鳥神社の神殿に安置す。

○ 外観 総長 103cm 像長 58cm

木彫り寄木造りの立像。

江戸時代に修理し彩色を施し面相も変えられて
ある。

像は四天王の1人、增長天を模して作った素人
作。兜はなく左手に鉾を持ち天の邪鬼を踏んで
いる。御身部は14世紀の作感がある。

天の邪鬼も新らしい。

○ 製作年代 室町時代（14世紀頃）

○ 作者 不明



白鳥神社御神像（桃生町域内）

もんじゅ（ぼくつ）
文珠菩薩座像

位 置 桃生町域内西嶺(旧中津山村)，町の東約1km

概 説 西嶺の香積寺庫裡の、奥の間に安置されてある。この仏像は登米町の真福寺（廢寺）にあったものだが、終戦後に寺に譲渡されたものという。

- ◎ 外観、総長138.6cm、像高59.4cm、木彫り寄木造りの座像。

この菩薩は宝冠が無く、顔は細長、眉目秀麗、理智的なきらめきがある。漆金箔は殆ど剥落し、黒い本地を現わし、腕に胸輪、手首に腕輪の金輪が残っている。葡萄唐草模様を透彫りした光背や、蓮台には金箔が残っている。仏像と蓮台は、小形の唐獅子の背に載っている。

- ◎ 製作年代 平安末期（12世紀頃）
光背と蓮台は13世紀頃の作感がある。
◎ 作者 不明



文珠菩薩座像（香積寺）（桃生町域内）

並川地蔵菩薩立像

位 置 桃生町域内西嶺(旧中津山村), 町の東約1km

概 説 香積寺の本堂の後方に接続した開山堂に安置されてある。

- 外観 像高113cm、木彫り寄木造りの立像で、鼻が欠け左の手がとれている。江戸初期に彩色を施したもの。
- 製作年代は宝町末期（天正年間）
- 作者不明
- 由緒 天正10年(1582年)主君織田信長を殺した明智光秀が、山崎合戦に羽柴秀吉に破れ、木櫻橋に殺されたあと、京の人々が、光秀が京の地子践を免じ、諸税の半を低くし、負担を軽くしたのを徳とし、京の町辻に13体の地蔵尊を建立して、光秀の冥福を祈った。この地像はその1体といわれる。

明智の遺臣並川掃部が、この地蔵尊を生國丹波国に持つて来て祀り、その後、掃部の孫・五郎左衛門秀清が、この地像を背負い、諸国を遍歴、明暦(1655年)頃に寺崎に来住、寺に納めたものという。秀清は宝永5年(1708年)10月19日、82歳で没す。



並川地蔵立像（香積寺）（桃生町域内）



聖観音立像（妙円寺）（桃生町座崎）

しょうかんのんじきづ 聖観音菩薩立像

位 置 桃生町座崎（旧桃生村），町の東約4km

概 説 座崎地区の妙円寺本堂内にある。

- 外観 像高は180cm、右手と左腕を欠いている。
相当古いもので前の寺、清覺寺にあったものを、
寺に納めたものという。木彫り寄木造りの立像。
- 製作年代 室町初期（14世紀頃）
- 作者不明



阿弥陀如来立像（淨音寺）（桃生町永井）

阿弥陀如来立像

位 置 桃生町表永井（旧桃生村），町の東北約4km

概 説 表永井の淨音寺に祀られてある。

- 外観 像高は30.5cm、木彫り寄木造りの立像
で、小形の古い仏像。両腕を欠いている。出所は
明らかでない。
- 製作年代 室町初期（14世紀頃）
- 作者不明

十一面觀音立像

位 置 桃生町太田入沢(旧桃生村), 町の東南約4km

概 説 太田入沢の長谷寺内に所蔵されてある。

- 外観 像高は44cm, 柔和でふくよかな顔をした青銅製の立像である。
- 製作年代 室町時代(15世紀末頃)
- 作者不明

(註) 昔、日高見神社の傍に、大悲閣という仏堂があり、木像十一面觀音立像が祀られてあった。中世頃、兵火のため神社も仏堂も焼失し、觀音像が行方不明になった。その後に、この仏像が代りの觀音像として、觀音堂に祀られていたのだが、明治になって神仏分離令によって、堂は壊わされ、仏像等は神社の片隅に放置されていた。最近、神社から寺へ譲渡されたものという。



十一面觀音立像 (長谷寺) (桃生町太田)

えん ぎょうじや 役の行者像

位 置 桃生町樺崎(旧桃生村), 町の東北約4km

概 説 樺崎の鹿嶋神社の神主、榎田末室氏所持。榎田氏は修験・竜性院の子孫。

- 外観 この像は像高19cm, 木彫り寄木造りで、腰を屈めた座像。古典を離れて造られているのが珍しい。

(註) 役の行者というのは、役の小角ともいい、奈良時代の人、山伏修験道の元祖と謂われている。大和の葛城山にのぼり、草衣木食、洞窟生活という原始的生活をしながら、孔雀明王像を安置し、難業苦行三十年、呪術の法力を収得し、神仏両教を修め、全国の靈山高岳を踏破して、修業を積み、修験の道を開いた。(後の優婆塞(僧でない仏者の意))ともいう。

- 製作年代 室町時代末期
- 作者 不明



役の行者像 (桃生町樺崎)

護持仏龕

位置 桃生町寺崎(旧中津山村), 町の北1km

概説 寺崎町の伊藤長敏氏所蔵

- ◎ 外観 銅製香合の形の器物で、両面を合わせるように作られている。円形の直径は6.5cm。両面の円形の銅板の内側に、飛雲や仏像を押出し、渡金箔を施してある。雲中の仏像は、向って左側は、梵文定印の釋迦如来の座像、右側は薬師如来の座

像らしいが、縁書きがついているので判然しない。珍しい優品。

- ◎ 製作年代 鎌倉時代(12世紀末頃)

- ◎ 作者 不明 出所は明らかで無い。当時の高貴の婦人が護身仏として、袋に入れ、首に吊るして懷中したものである。



護持仏龕 (桃生町寺崎)

貝塚

櫻崎貝塚

位置 桃生町櫻崎貝塚(旧桃生村), 町の東約4km

概説 櫻崎丘陵の東北部の舌状台地にあり。

貝塚の面積は60m×30m, 高い所で23m, 低い所で8m程度の小貝塚で、北上川の河岸の近くにある。

◎ 年代は縄文時代の早期前期に属する。貝類は主として蛤で、鹹水産のアサリ、カキ、外に淡水産のシジミ貝を含んでいる。その当時は、今の水田あたりが海水の波打際、附近に蛤の棲息した砂浜や、カキの付着した岩石海岸もあったと考えられる。又、貝塚層から古入骨1体、土器、骨器、石器も発見された。土器は編年上、縄文時代の早期、前期の土器と見られる。



櫻崎貝塚出土、貝類 (桃生町櫻崎)



櫻崎貝塚 (桃生町櫻崎)

深山貝塚

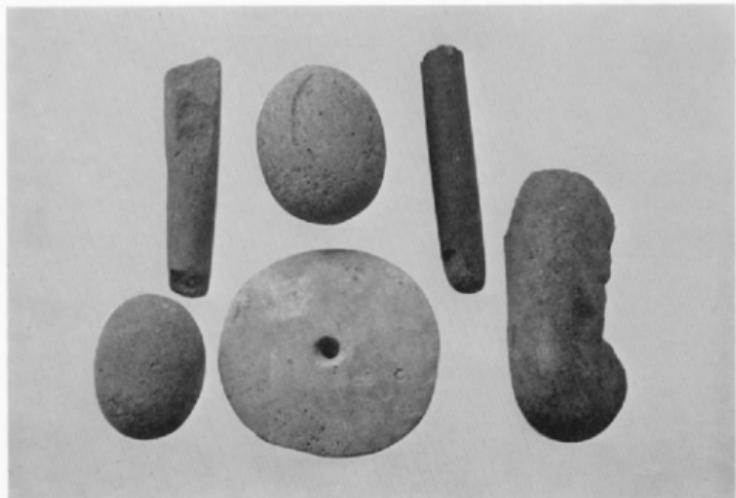
位置 桃生郡倉坪深山（旧桃生村），町の北約5km

概説 倉坪深山地区の北上川自然堤防の上にある。貝塚の面積は30m×50m程度のもので、今は樹木が茂っている。

◎ 年代 繩文時代の後期、晩期に属する。

シジミ貝を含む淡水産と、アサリ、オオノ貝などの、鹹水産の貝類を出土しているので、その当時のあの附近の環境が想像される。

石器には打製石鎌、磨製石斧、石刀、石棒、石皿などが出土し、土器の大部分は繩文晩期の遺物で、鉢型、壺型、皿型、台付皿型土器などが含まれている。中津山才二小学校並に桃生小学校に所蔵されている。



深山貝塚出土、土器、石器（桃生小学校）

埋 藏 遺 物

わらびで ほうとう 蕨手太刀と方頭太刀

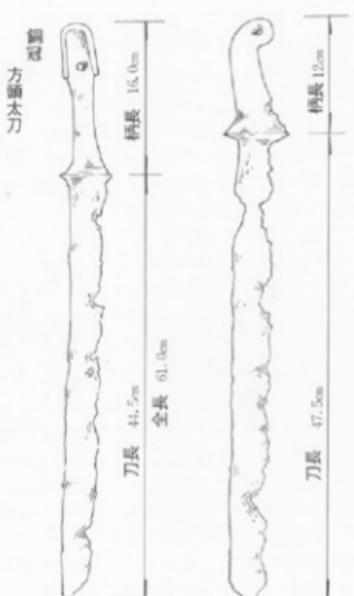
位 置 桃生町山田（旧桃生村），町の東約5km

概 説 同地の守栄氏所蔵のものである。

蕨手刀は曲玉と一緒に、明治7年に、守清作氏が山田山の高道幕から100m上方の、梅ヶ追岡を開墾したとき、掘り起したものという。2口の剣は長く土中に埋まっていたので、刀身が腐蝕して、刀形を残すだけである。方頭太刀は柄頭に、方形の銅冠をはめたもの。

外 観	蕨手太刀	全長 60.2cm
		刀長 47.5cm
		柄長 12.0cm
方頭太刀	全長 61.0cm	
		刀長 44.5cm
		柄長 16.0cm
小 刀	全長 31.0cm	
		刀長 17.5cm
		柄長 13.0cm

小刀は合戦谷出土のもの。奈良時代。



方頭太刀と蕨手太刀 (桃生町山田)



曲

玉 (桃生町山田)

まがたま
曲玉その1

位置 前と同じ

概説 藏手太刀 方頭太刀と同時に発見されたものである。

外観 曲玉は瑪瑙長さ4cm

曲玉その2

位置 桃生町陸崎（旧桃生村）、町の東約4km

概説 同地の佐々木恒平氏所蔵、1200年前の、奈良時代の古墳より出土したものであるが、1500年—1600年前のものかも知れない。桃生築城以前のものとしては、此地方最古の曲玉と思う。

外観 曲玉は瑪瑙長さ3.7cm
巾1.2cm、厚0.9cm

(参考) 山田古墳群

概説 先掲の藏手太刀、方頭太刀等の出土した山田地方は、7—8世紀頃の古墳地帯であった。犬頭山丘陵が北上川に臨む傾斜面に、5、6基の古墳があったとか、現在の河道にも、数基の古墳があった。河川改修のとき壊わされたという報告もある。又、徳川時代の貞享年間に、山田山の谷間から、人骨、馬骨、古刀が沢山発掘されたという。恐らく古墳時代に、此地方に先住民族の聚落が作られ、その首長の墓地がこの古墳群であろう。



曲

玉 (桃生町陸崎)

布目瓦と須恵器(宗全山麓出土)

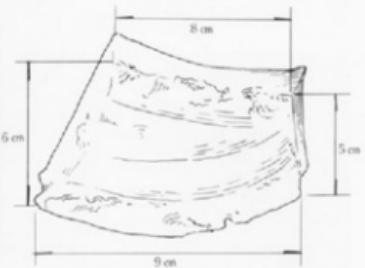
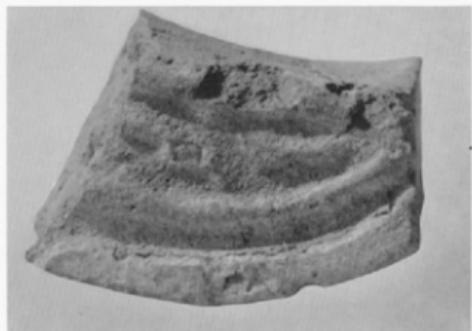
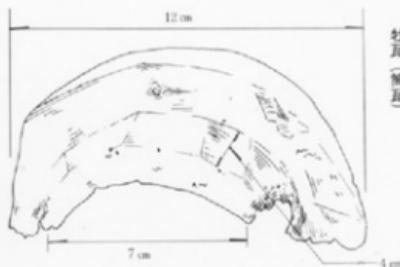
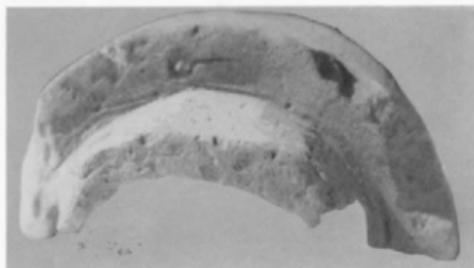
位 置 桃生町太田(旧桃生村), 町の東約3km

概 説 桃生町中津山公民館蔵, 時代は奈良時代, 宗全山の麓, 太田十貫から薬田に至る, 台という丘陵地帯から出土したもの。

布目瓦は多賀城や, 陸奥国分寺につぐ, 時期に造

られた屋根瓦で, 官営の窯で焼いたものである。附近に式内社日高見神社もあり, 桃生城跡を探す手掛りとなろう。

須恵器は平安初期のものか。



布目瓦 (宗全山麓出土) (桃生町公民館)

(参考) 宗全山附近遺跡

概 説 宗全山は130mの高峯、その麓の20m程度の丘陵を台とよび、面積3反ばかり、耕やされて田となっている。一帯を太田細谷といふ。

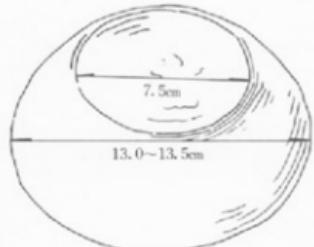
布目瓦の軒瓦は、中央に楕円型の文様、その左右に二条の唐草模様を配し、その下に一条のみぞが彫り込まれている。平瓦は目の荒い麻布で押しつ

けである。筒瓦は有段筒で段の部分が短い、窓跡はまだ発見されないが、錐瓦は最近、台の近くの太田分校の裏から発見されたといふ。

土師器は内黒糸切底、須恵器は叩出し文のある壺、甌の類である。この宗全山附近遺跡は律令政治中心の、奈良一平安初期の遺構とも考えられる。



須恵器（宗全山麓出土）（桃生町公民館）



内深さ 3.2cm

外深さ 4.0cm



布目瓦(長者森出土)

位 置 桃生町給人町(旧中津山村), 町の西方 2 km
(中津山第一小学校蔵)

概 説 時代は奈良末期か平安初期すれども、河北
町長者森出土のものである。

外 観 平瓦 上部23cm(横) 縦32cm
下部27.5cm(横)

宇瓦 上部21.5cm 縦31.5cm
下部27.0cm

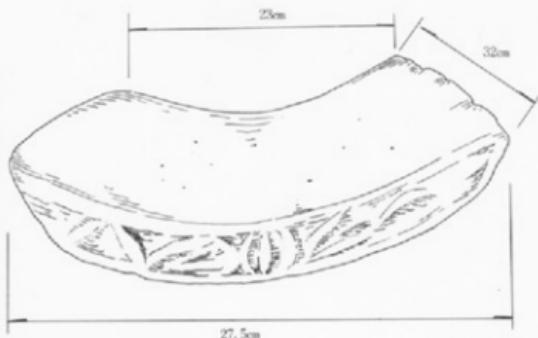
牡瓦 上部10cm(横) 縦5 + 31cm
下部15cm(横)

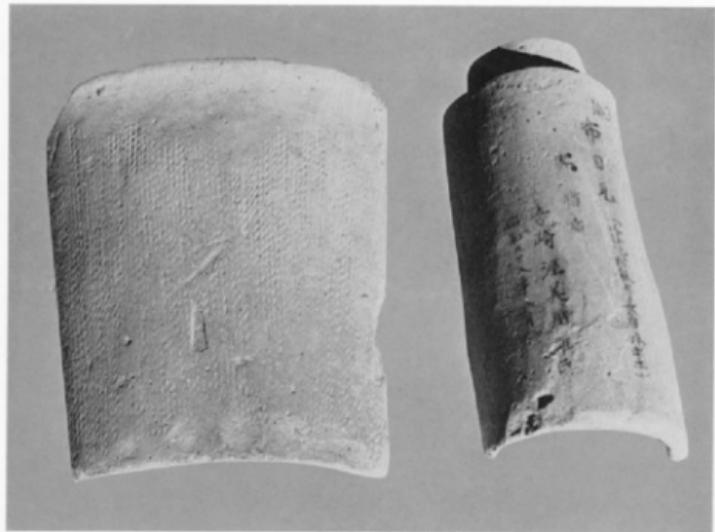
(註) 宗金山出土の瓦はやや古い。何れも貴重な遺物。
その前に頼んで本格的に調査した方がよい。



布目瓦 平瓦 (長者森出土)

(桃生町中津山第一小学校)





布目瓦（長者森出土）

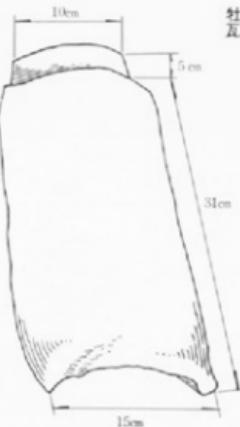
(桃生町中津山才一小学校)

左：宇瓦 右：牡瓦

宇瓦



牡瓦



建築

花天井

位置 桃生町城内西端（旧中津山村）、町の東約1km

概説 城内地区の西端。曹洞宗香積寺の本堂の天井である。

○ 様式 格天井、寺の本堂は延享4年（1747年）に建てられたもので、天井は普通に見る格天井、天井の間毎に描かれた百花の図はすばらしい。天然の色彩を施し、頗る美麗なものである。仙台四大画家の一人、菊田伊州が寺に1ヶ月逗留して描いたものという。年代は文化、文政頃のもの。

薬医門

位置 桃生町表永井（旧桃生村）、町の東北約4km

概説 表永井の村田氏居館の南方に位置する遠山徳男氏屋敷の表門である。

○ 様式 1間1戸、切妻造り、屋根は昔は萱葺この門の柱は、前は方柱、後ろに控柱がある。巨大な冠木門、軒は腕木でうけている。両開きの板唐戸には、鉄の隅金具と、八相の金具がついているし、扉には潜戸がある。昔は門の左右に長屋があったが今は無い。

建築年代は明らかでないが、江戸中期と思う。遠山氏は村田氏の家老職の家柄。



花天井（香積寺）（桃生町域内）



薬医門（桃生町表永井）

無形文化財

法印神楽

位置 桃生町寺崎字町（寺崎神楽団）（旧中津山村），町の中心部
桃生町櫻崎（櫻崎神楽団）（旧桃生村），町の東約4km

概説 桃生、本吉、牡鹿地方に行われている神楽を法印神楽という。

◎（由来）いまから300年前、中津山の白鳥神社の神主で、大館淹本坊という傑出した人がいた。京の聖護院門主に随って、入峯修法して法印となり、彼地でお能を修得し、出雲流の神楽と能狂言から、いま行われている神楽を編出したものという。

◎（変遷）江戸時代には、各神社の祭典に神楽を奉納した。神楽は法印達だけで演じられたもので各神社の法印達が、代々伝承保存して來た、伝統芸能である。明治維新後は、新たに神社令が發布され、修驗即ち法印が神主になれなくなったので、神楽をやる神主がへり、その伝承保存が難かしくなって來た。

大正の初め頃から、旧中津山、桃生の一般の人達も、法印の指導をうけて、神楽をやるようになり、寺崎神楽団、櫻崎神楽団が発足したのである。

◎（様式）神社の祭りには社前に舞台を作る。舞台は三方吹流し、後ろに幕を張り、柱に忌竹、天井に大乗を下げる。更に舞台上に、能の懸垂りや鏡の間をつくる。囃子方は太鼓と笛で銅鑼拍子をとる。舞人達は千早という長振袖に袴をはき、刀を帯び假面を冠ぶり、手に白扇と梵犬を持って舞う。

初めての神樂（神楽詞）を唱え、笛、太鼓で囃子立てる「銅鑼拍子」に合わせて仕舞となる。仕舞は壯麗、優美、幽玄な趣きがある。番数も太神楽となると33番。3日もかかるという。お祭りには数番やるだけである。

（註）昭和46年12月 町無形文化財指定。



「日本武」の舞台

法印神楽(1) (桃生町)



日本武舞

法印神楽(2) (桃生町)



岩長榮

法印神楽(3) (桃生町)



翁

法印神楽(4) (桃生町)

はねこ踊

位置 桃生町寺崎（旧中津山村），町の中心部

概説 この踊は獣囃子、御田打ち囃子、馬鹿囃子の3つからなる。内囃子に合わせて、踊子達が、跳んだり、はねたりする身振りで、急テンポに踊り廻る賑やかな豊年踊りである。

◎（由来）この踊りの発祥は不明だが、天明天保の大凶作で、苦しい生活をしていた寺崎村の人々が、或年、久し振りに大豊作に恵まれ、大悦びで、八幡神社に御禮踊りをし、手を振り足拍子をとり、面白ろ可可愛い身振りで、踊り廻ったのが始まりという。その後、この踊りに舞踊の要素を取り入れ、田打ちから刈取りまでの、一連の田作りの動

作を踊りに加えて、豊年踊りとして完成されたものである。田聚踊りが前身？

◎（様式）町の鎮守寺崎八幡の神輿渡御には、この踊りが行列のお伴をする。内囃子の連中が山車に乗り、笛や太鼓で囃子たてると、山車の前方で、道路を行進しながら、布で顔を覆い、色模様の長襦袢をき、化粧廻しを着けた、若い男女の踊り子達が踊り廻る。この踊りの中に、仮面を冠った道化者が、踊り子達の間を飛び廻り、踊りを一層、賑やかなものにしている。

（註）昭和46年10月 町無形文化財指定。



はねこ踊（桃生町寺崎）

古木

その1 杉

位置 桃生町牛田（旧桃生村），町の東北約3km

概説 牛田の五十鈴神社の境内にあり。

樹令凡そ700年，根周り6m，樹の高さ約16m，樹枝の広がりは40m平方。大幹が4本の幹に分れ中空に錐えてる。

その2 檵

位置 桃生町太田（旧桃生村）町の東約3km

概説 太田十貫，宮崎の日高見神社の石段，神坂の中腹の左側に錐えている大木である。樹令凡そ700年，根周り6m，樹の高さ5m，樹枝広がり40m平方。古木の根元には大洞穴があり，幹は二股に分れ，右幹の周りは2.12m，左幹の周りは2.72m，左右の幹はかなり枯死している。



杉（五十鈴神社境内）（桃生町牛田）



檟（日高見神社境内）（桃生町太田）

その3 皂莢

位置 桃生町向永井（旧桃生村），町の東北約3.5km

概説 向永井の森山広氏の屋敷の門口の脇に立っている。樹令400年、根周り4.1m、樹高さ15.2m、枝の広がり30m平方ある。葛西氏の遺臣が葛西氏没落後、主家の再興を夢みて、各自の邸の門口に皂莢を植えたものという。森山氏は葛西氏遺臣の末葉である。



皂

莢 (桃生町向永井)

その4 紅梅

位置 桃生町城内館下（旧中津山村），町の東約1km

概説 城内地区の黒沢氏の屋敷内に植えてある。樹令240年、幹は東西の二股に分れ根周り2.6m、樹高さ10m、樹枝の広がり40m平方。樹はかなり弱っている。

(註) この紅梅は藩主伊達吉村公が享保10年(1725年)3月、封内巡回のとき、当地の領主黒沢家に立寄り、自ら植樹したもので、当時としては無上の光栄であった。昔は樹勢旺盛で、花時には四方八方から遠望され、一大美観を呈したものだが、いまは昔の面影が見られない。館の紅梅という。



紅

梅 (桃生町城内)

交通史跡

寺崎駅場址

位置 桃生町寺崎字町(旧中津山村)、町の中心部

概説 元和年間の北上川大改修後、伊達藩では新たに東浜街道を開設し、仙台原町から小野、庄瀬、和瀬、寺崎、柳津等に宿駅を設けた。寺崎駅場が置かれたのは正保2年(1645年)、ときの地頭・田中勘左エ門が、中津山に接続して町を作り、地割りして、1軒の間口を3間半(半間地)とした。宿駅は都奉行の支配下で、肝入、検断、馬指などの役人が駅内を取締り、駕や馬や人夫が常備された。次の宿駅から次の宿駅へと、馬を取りかえ、人夫を交代させたが、こういう事は、役入や

侍達だけがおもで、一般の人々は簡単に使えなかったという。藩からの通達文を掲げる札場もあった。毎月の3と9の日には、町に市日が開かれ、諸方から商人や買人が集り、茶屋や旅館が繁昌し、賑やかな町であった。いまは見られないが、町の中央に小堀が流れ、小路を二分し、上小路は侍、下小路は町人百姓の通路であったという。昔は半間地に同じ構いの家が並んでいたが、いまは大部分、新築されて、昔の雰囲は見られない。神取町が駅場になったのは、幕末の天保以降である。



(土蔵造りの店と土蔵) 寺崎駅場址(1)



(格子戸構いの店) 寺崎駅場址(2)

旧 跡

あつじん 遠藤曰人生誕地

位 置 桃生町寺崎（旧中津山村）、町の中心部

概 説 生誕地は寺崎と中津山の境の小路と、町裏街道に面した、800坪程の屋敷だが、今は西条氏外数人の屋敷内に分割されている。曰人は江戸時代後期、文化、文政頃の人で、寺崎の木村家に生まれ、給人町大番土遠藤氏の嗣となり、名は定矩、通称清右衛門、後に伊豆之助と改めた。多能の士で、経史を志村五城に学び、鈴鹿流の薙刀を能くし、豪岸不屈の侍でありながら、俳句は天才、近世俳諧の大家であった。その句は奇警洒落で常人と異なり、諸国を遊歴して多くの俳人と交わり、旅から帰れば、給人町の芭蕉庵で句作にふけった

という。門人は千人。彼はまた書画を能くし、筆法雅淡、絵は鳥羽絵風。

河北町字合戦谷に、曰人の記念句碑が建っている。天保7年4月20日（1836年）歿す。年79。仙台市連坊小路松音寺に葬る。

法諱は、竹林軒宿月曰翁居士
彼の句2、3を掲げ、その面影を偲ぶ。
「立ちまれば 名月もたぬ松もなし」
「宮城野に 大根植えて へらしけり」
「木の股に われをかけらば桜の木」



遠藤曰人生誕地（桃生町寺崎）

植立山

位 置 桃生町寺崎八木(旧中津山村),
町の中心部

概 説 昔、北上川の本流が、赤生津で追川を合流して、中津山西南を通り追波に注いだ。当時、両川の泥砂が堆積して、ここに大砂丘が出現していたという。元和3年(1617年)登米館主・伊達宗直が、北上川の大改修工事を行ない、柳津から西方に、新川を掘って迂回し、追川に合流させたとき、この砂丘を堀きくし、掘上げたのが此砂山で、防砂林として、松を植えたので植立山という。

享保年間(1725年)中津山領主・黒沢俊栄が、更に松を植えて密林とし、やがて、この密林が繁茂して大松林となった。北上の清流に臨み、所謂白砂青松の勝景の地である。近年、傍らに、三階建ての統合中学校の大校舎も新築され、植立山の公園化に、町も熱意を示している。



植立山(1) (桃生町寺崎外八木)



植立山(2) (桃生町寺崎外八木)

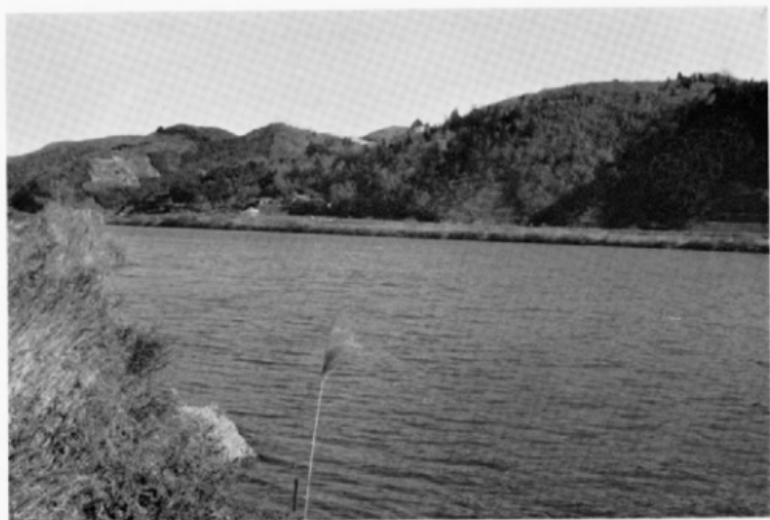
北上川

位置 桃生町周辺

概説 北上川は岩手県にその源を発し、南流して宮城県に入り、柳津で2つに分れる。本流は柳津から右折して倉持を通り、大きく迂回して庄又から石巻の川口に注ぎ、新川は山田の山峡を南下し、飯野川から追波川となり太平洋に注ぐ。桃生町は北上川に囲まれた川中島のような存在である。殊に、新旧北上川の水量調節のために、柳津と鳴瀬の間に洗堰が設けられ、塞の神の開門で、船の通航が阻まれてから、旧河は水量が減じ、砂州が拡がり、船の往来もなくなった。嘗て、水量豊富で流れも緩く、洋々たる水上に真帆・片帆、風を孕んで上下した閑かな風物詩は見られなくなった。然し、北上川は幾千年もの長い間、悠々として流れ、文化を運び、桃生の歴史を作りながら、時代と共に変遷して、今日の流れとなつた。北上川は桃生の母である。岸辺に立って、静かに川の流れを眺めると、凡ゆる時代の桃生の移り變りを、無言のうちに教えてくれる。



旧北上川の神取橋より上流を望む（桃生町）



北上川 西岸の櫻崎より上流(橋本)を望む(桃生町)



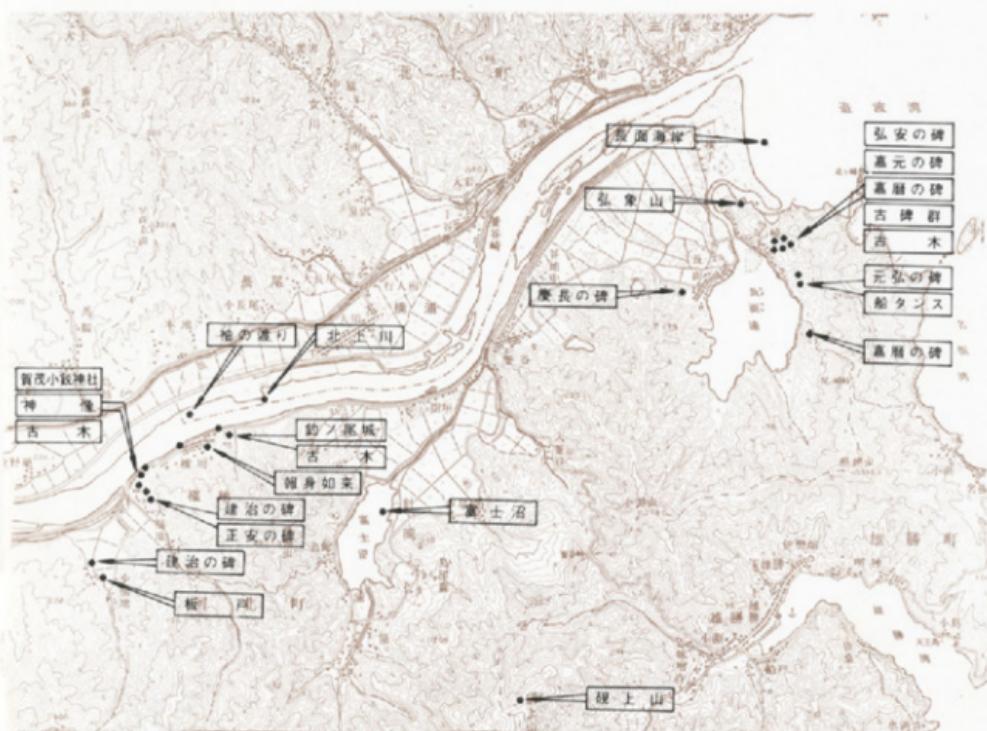
北上川 櫻崎より下流(太田の大綱山, 爰岩山)を望む(桃生町)

河北町の部

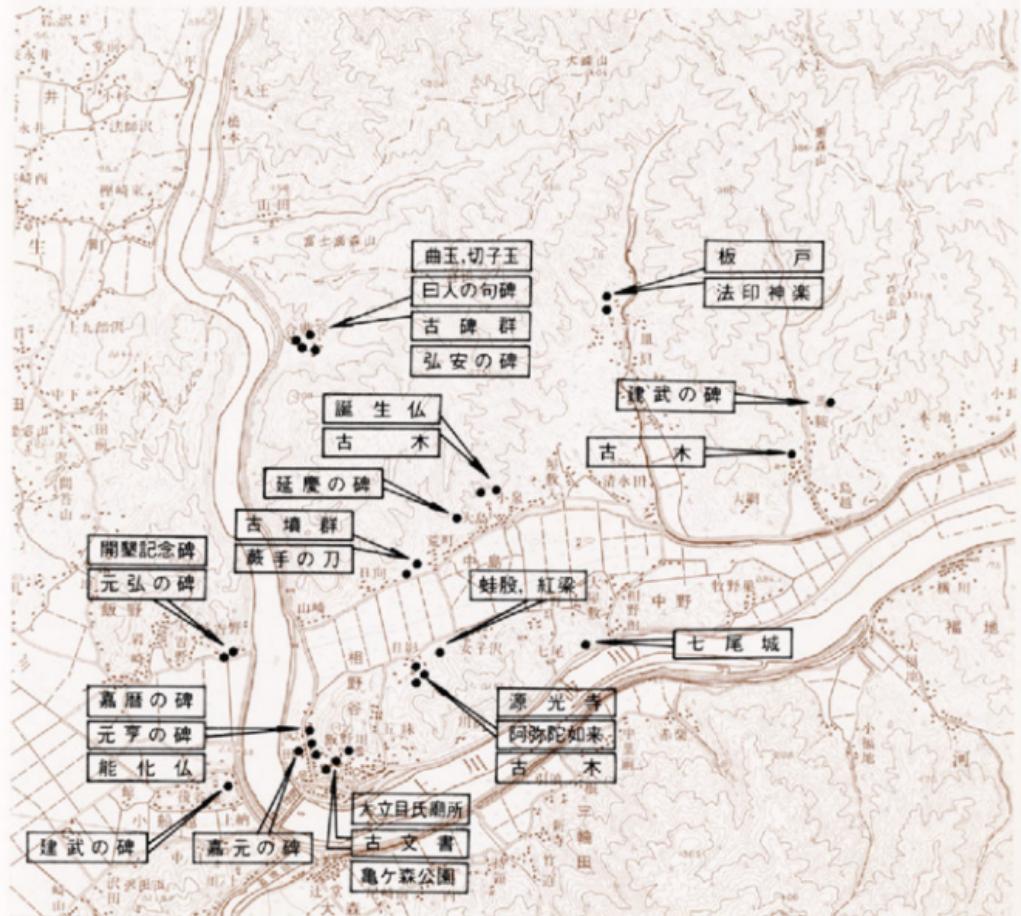
神	社	72
寺	院, 廟	76
古	城 館	78
古	碑	81
古	碑 群	95
古	墳 群	98
墓	碑	99
神	像	101
佛	像	103
埋	藏 遺 物	108
建	築	111
文	具, 器 物	113
無	書	114
古	形 文 化 財	115
交	木	116
自	通 史 跡	119
	然	120

註 位置を表わす「町の北約〇〇km」或は「町の南
約△km」は、それぞれの町役場の所在地を基点
としての距離です。

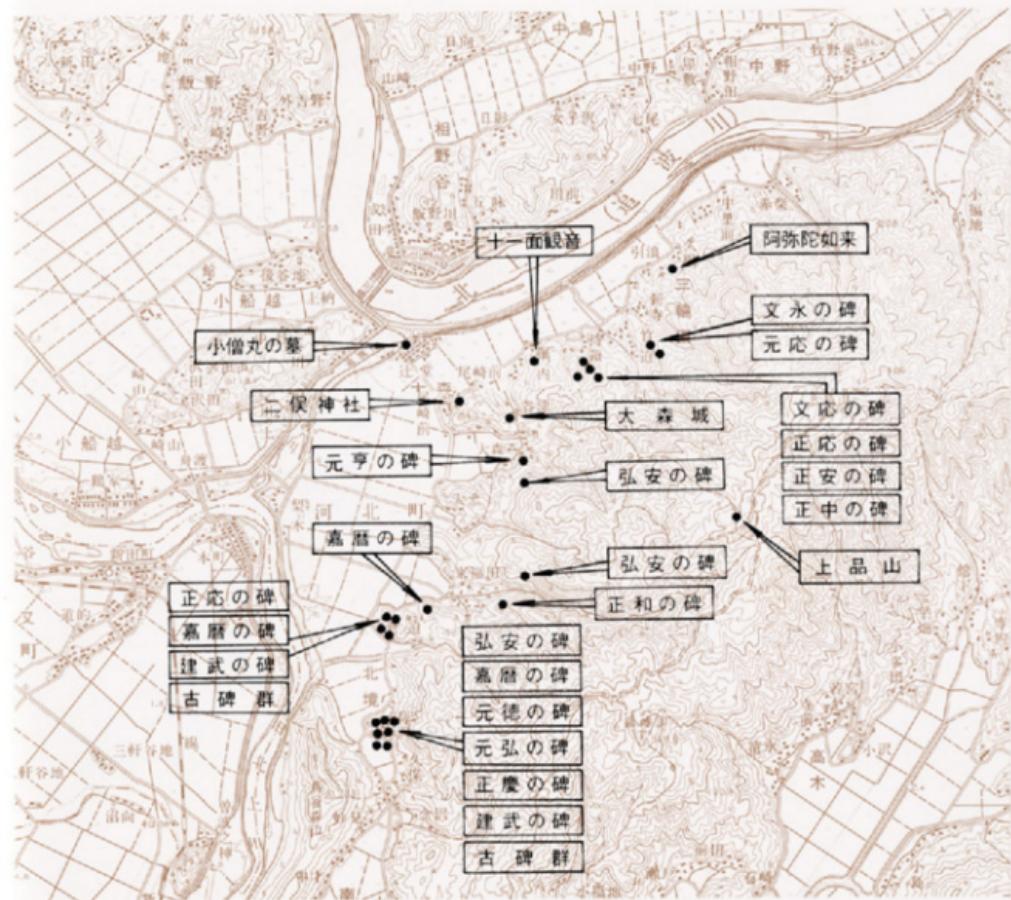
河北町大川地区の文化財



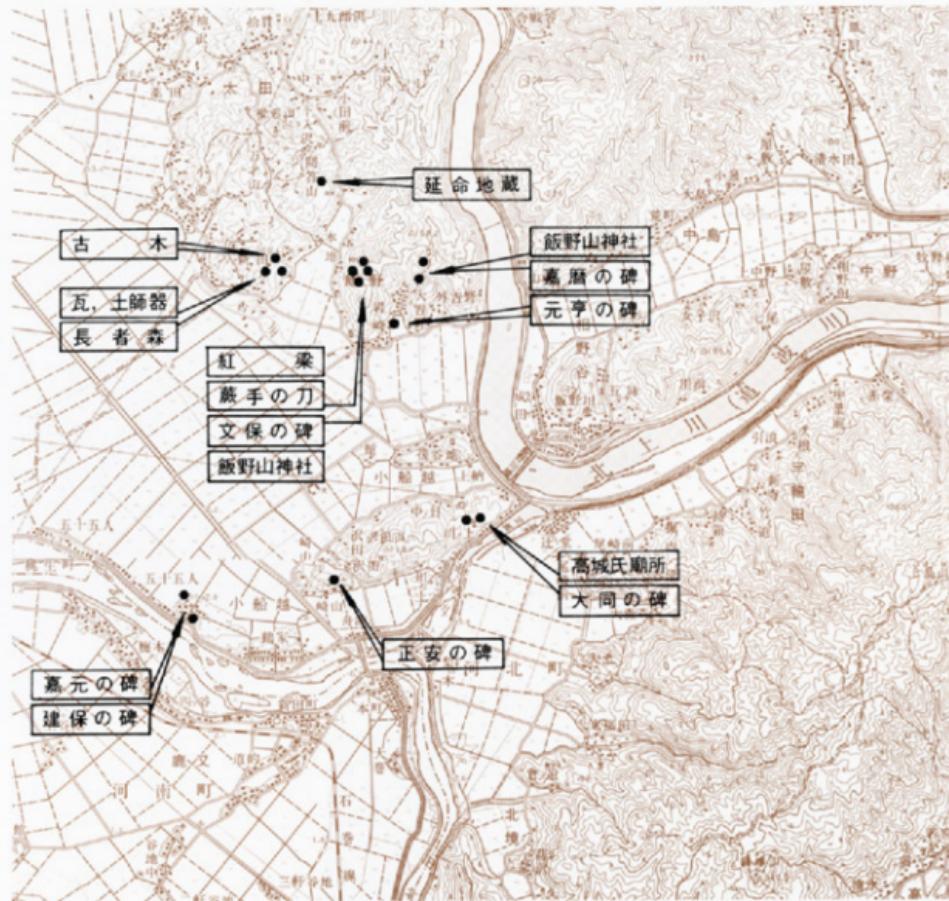
河北町飯野川地区の文化財



河北町二俣地区の文化財



河北町大谷地地区の文化財



神社

飯野山神社

位 置 河北町吉野（旧大谷地村），町の西北約3km

由 緒 延喜式内社，桃生六座の一

設 置 平安時代 800年代

概 説 最初の社祠は長い年月の間に魔巧して失せたが天和年中ここに一社が設けられ雷電の宮と称された。これが古昔の飯野山神社の遺跡であるという。のち火災で焼失したが再び社を建て、現在の飯野山神社に復した。遺物は火災のときすべて焼失した。境内は広く、赤松の巨木が茂り森々として古社の面影をしのばせる。境内に邦良親王の墓と伝えられる嘉曆年号の碑がある。



飯野山神社 その1 (河北町 吉野)



飯野山神社 その2 (河北町 吉野)

飯野山神社

位 置 河北町飯野本地（旧大谷地村），町の西北約
4.0 km

由 緒 延喜式内社。桃生六座の一
設 置 平安時代（800年代）

概 説 昔時社殿は宮森の頂上にあったが、領主山崎源
太左衛門景憲が、文化年間、北辺警備より無事帰
還できたのは神護によるものとし、文政年間（1818
年頃）新に社殿を現位置に造営し、神靈を移し、尊

崇の誠をつくした。境内に文保の古碑があるし、
宝庫には附近より発堀された藏手の刀、栗田口住
国友作の名刀、古文書等が所蔵される。一の鳥居の
扁額は有栖川宮御仁親王の御筆であると伝わる。
境内には樹令400年位の老杉数多くあり、環境は
森巣である。

（註 藏手の刀、古碑、社殿建築等については別記参照）



飯野山神社 その2 (河北町飯野本地)



飯野山神社 その1 (河北町飯野本地)

二 俣 神 社

位 置 河北町尾崎（旧二俣村），町の東南約1km

由 補 延喜式内社，桃生六座の一

設 置 平安時代（800年代）

概 説 明暦めいれき（1655年）以前，辻堂が青ヶ崎（現在の梨木）にあって宿場町として栄えた当時は，この宮を中心として繁昌した門前町でもあった。その後北上川の出水による堤防の決壊のため，辻堂は二度も移転し，神社のみ元の場所に残されていたが，明治44年3月羽黒神社のある現地に移された。



二 俣 神 社 その1 (河北町 尾崎)



二 俣 神 社 その2 (河北町 尾崎)



賀茂小銳神社その1 (河北町大福地)

わどの
賀茂小銳神社

位 置 河北町大福地（旧大川村）。町の東約6km
由 補 延喜式内社。桃生六座の一
設 置 平安時代（800年代）

概 説 奥の院に御神像7体を安置してある。この御神像はすべて木像カツラ材一本造りで、平安時代～鎌倉時代初期の作である。内5体は昭和30年県重要文化財の指定をうけた。尚、小銳神社（延喜式内社）に古い時代、賀茂神董が合祀され、以来「賀茂小銳神社」と称されている。境内には樹齢300～400年の松と杉が繁茂し、境内はいとも森厳である。

（註 神像、古木については別記参照）



寺院廟

源光寺と葛西氏御靈屋

位置 河北町日影（旧飯野川町），町の北部約1km

概説 源光寺は寛永4年（1627年）旧相野谷村領主として来住した葛西氏の菩提寺で、明暦2年（1656年）開基とある。廟所には初代俊信以下、累代の墓石がある。飯野川葛西氏は、中世大豪族17代葛西晴信の岐れ（弟の子）重俊に発する。江戸時代の初め重俊は伊達家に仕え、準一家の格式となる。その子俊信は1000石を領して相野谷村に入来し、以来6代、140余年間、明和6年（1769年）この地を去るまで、領主として村民の繁栄と福祉のための善政を布いた。境内に天保凱蹟の「三界万盡塔」等があるし、又樹令300年を超える高野楓と榧の古木がある。

（註 仏像、古木については別記参照）

源光寺山門（河北町日影）



葛西氏御靈屋

（河北町日影）



大立目氏廟所
(河北町田屋敷)

高城氏廟所 (河北町川の上)

大立目氏廟所

びょうしょ

位 置 河北町飯野川田屋敷（旧飯野川町），町の中心部北山麓

概 説 今の宮城県飯野川高等学校の裏山に安永4年（1775年）。旧相野谷村領主として来住した大立目盛行以下累代の墓所がある。大立目代は伊達家一族の格式、知行1000石。94年間善政を布き、明治4年この地を去って旧領地である登米郡中津山村（現米山町）に移住した。山麓下の、現高等学校の敷地は、旧領主の館跡である。

高城氏廟所

位 置 河北町川の上（旧大谷地村），町の南約1.5km

概 説 旧小船越村領主高城宗直以下累代の墓石がある。高城氏は伊達家の一族で、初代以来明治維新に至るまで約220年間、450石を知行し、領主として善政を布いた。延命寺は高城氏の菩提寺で、開基は延宝元年（1673年）11月とされている。境内に大同の碑（「古碑」の項、参照）があることでも知られている。



古城館址

七尾城址あと

位置 河北町中野（旧飯野川町），町の東約3km

概説 鎌倉時代の初期、文治5年（1189年）、奥州総奉行の葛西清重が北上川防備のためここに堀を築き麾下の部将を配置して守らせた。当時はここを七王館ともいった。後、戦国時代に入り、山内首藤氏桃生郡北方に堀を張り、頼通の代に旧堀を修復してここに居住。主城の外に、西北に各3つずつ出城を造った。合わせて7つの堀なので七尾城と称した。戦国末期の永正8年～12年（1511年～1515年）石卷日和山城居住の葛西宗清と首藤貞通とが確執を生じ合戦となる。葛西軍は数万の兵を以

て、この首藤氏の主城七尾城を包囲攻撃した。当時の七尾城は三方水に囲まれた難攻不落の堅城であった。葛西軍ももてあまし、最後は兵糧攻めによって漸く首藤氏を降した。後、一族の葛西六郎茂清や守重が居城したが、天正18年（1590年）葛西氏が豊臣秀吉に滅ぼされ、以来この城は廃墟となつた。本丸の高さ70m。二の丸、三の丸、他に土堀、外堀、門跡等現存している。中世山城の典型的なものとして、旧記にも詳しくその規模が記されている。現在は杉林、雜木林となる。



七尾城址（河北町 中野）



大森城址（河北町 大森）

大森城址

位置 河北町大森（旧二俣村），町の東南約1.5km

釣ノ尾城址

位置 河北町横川（旧大川村），町の東約8km

概説 高さ80m、東西150m、南北230m。本丸は円形で直径30m。二の丸も円形で直径75m。土壇6段、空塙、曲輪残存する。三方断崖で無類の要害を形成する。七尾城の支城的存在で、山内首藤氏の一族、山内左馬之助の居城と伝わり、同時代のもの。現在は山林、畠地となる。

概説 室町中期頃より山内首藤氏は桃生北方に覇を唱え、漸次北上川流路南方に進出、この大森城を修築して、その居城永井城よりここに移った。旧記には東西47間、南北27間とある。永正の役には葛西、首藤両軍の攻防の地となった。戦後は葛西氏の部将、男沢筑後が居城したと伝えられている。本丸の高さ50m。本丸、二の丸、三の丸、東の丸、西の丸、門跡、三重の空塙、土壇、曲輪等の遺構は歴然と認められ、中世における山城の典型として高く評価されている。天正18年（1590年）葛西氏滅亡と共にこの城も廃墟と化し、現在は畠地となつた。



釣ノ尾城址（河北町 横川）

長者森址

位置 河北町飯野（旧大谷地村），町の西北約4km

概説 高さ70m、東西500m、南北200m。本丸は東西70m、南北60m。二の丸は直径100m以上の広地となる。空堀、土塁、土壇などその遺構は歴然と残存している。桃生城の中心地（兵站地、基地）だったとの説が有力視されている。中世以降も豪族の居住地となった所と推定。二の丸の南面広地よりは、布目瓦多数出土しているし、近くの畠地よりも土師器、須恵器及その破片などが多数出土、現在も埋蔵されている。

（註 埋蔵遺物については別記参照）



長者森址（河北町飯野）

古 碑

だいどう 大同の碑

位 置 河北町川の上（旧大谷地村）、町の西約2km

概 説 延命寺境内にあり大同年号（806年頃）のもの。明治43年、沢田地区の山畠より発掘された。高さ80cm、巾40cmの板碑。碑面に「大同4年8月2日治□大夫大伴□□里久」と刻んである。刻みは極めて浅く、小刀ようのもので彫った形と観察される。年代が古く珍重なものとして大正年中発刊の仙台叢書の巻頭に写真入りで世に紹介された。しかし、その後多くの識者、研究家も見たが、誰一人本物と断定した人はなく、今以て真偽不明、むしろ偽作を見る意見が多い。



大同の碑（河北町川の上）



建保の碑（河北町五十五人）

けんぱう 建保の碑

位 置 河北町五十五人（旧大谷地村）、町の西南約6km。

概 説 広幡八幡境内に立つ。碑面に建保四年—(1216年)十月一日とある。五十五人部落は仙台藩になってから開拓された鉄砲足軽部落である。従ってこの碑は後年どこからか運ばれてここにおかれたものとみられる。境内に現存するその他の2・3の古碑からもそれが推定できる。この碑も真偽不明と言わねばならない。

高さ 90cm、巾 91cm、厚さ 10cm。

ぶんのう

文応の碑 No. 1, No. 2

位 置 河北町持領（旧二俣村），町の南東約3km

概 説 高徳寺境内に文応の碑が2基あり、旧記にも書かれ、古くから知られている。その1基（No.1）には「□應元年大歲庚申八月平朝臣真信敬白」と刻まれ、上部が欠損して一字が見えない。暦で調べると欠損の文字は文である。この碑は高徳寺本殿須弥壇の真下に丁重に安置されているので、高貴な人のものと推定される。高さ88cm、巾28cm。他の1基（No.2）は近年砂防工事の際、同地区内大沢より掘り起こされたものだという。「文應三年六月廿六日」と刻まれるが、文應4年は1263年にあたる。



文応の碑 No. 1 (河北町持領)



文永の碑 (河北町竹道)

文永の碑

位 置 河北町竹道（旧二俣村），町の東南約3km

概 説 高さ175cm、巾43cm、厚さ7cm、「文永十年大歲□□二月二十七日」と刻まれており、文字も明瞭に読みとれる。前からここにあったものではなく、同地区内のどこかにあったのを、ここ一ヶ所に集めたものらしく、他にも古碑数基がある。文永は鎌倉時代北条時宗の時代（1273年）で約700年前の碑である。碑の高さ175cm、巾44cm、厚さ9cm。



建治の碑 No. 1 (河北町小福地)

建治の碑 No. 1

位 置 河北町小福地（旧大川村），町の東約6km

概 説 この碑は廃寺・祥雲寺跡（寺山）附近から発掘されたものを、いつのころかここに移したのだという。この碑は高さ243cm、巾65cm、厚さ20cmの大きな供養碑である。墓石面は一面に厚い苔でおわれ風雨のため磨滅して、辛うじて建治三年（1277年）と読みとれる。この碑と並んでやや小さい古碑があり、文字は全然見えないが、同時代のものと推定される。



建治の碑 No. 2 (河北町大福地)

建治の碑 No. 2

位 置 河北町大福地（旧大川村），町の東約6km

概 説 この碑は建治2年（1276年）の供養碑で、廃寺永福寺附近の畠地から発掘されたのをここに移したのだという。碑の高さ114cm、巾145cm、厚さ30cm。

こうあん

弘安の碑 No. 1

位 置 河北町大森（旧二俣村），町の南約3km

概 説 この碑は清水部落にあるので、古くから「清水の碑」として知られ、旧記にもでている。旧道はこの部落から山越えで大土部落に通じていたが、この碑は山道登り口の右側に位置して立つ。現在は、杉の若木の林の中に倒れているので道からは見えない。碑の高さ207cm、巾83cm。「弘安三年十一月廿六日」—(1281年)と刻まれている。しかし他の文字は磨滅して読みとりにくい。大石の重量感があふれ、碑面の上部には弥陀三尊をあらわす象形模様、梵字が刻まれ、おかし難い偉容を見せる珍しい供養碑である。

弘安の碑 No. 2

位 置 河北町北境（旧二俣村），町の南西約5km

概 説 北境法華堂登り口右側にあり、「弘安三年十二月三日」—(1280年)と刻まれている。碑の高さ、150cm、巾32cm。

弘安の碑 No. 3, No. 4

位 置 河北町東福田（旧二俣村），町の南約4km

概 説 東福田の蛇沢山長泉寺山門付近に2基の弘安の碑が立っている。
1基（No.3）には「弘安三年五月二日」—(1281年)と刻まれている。碑の高さ125cm、巾23cm。
他の1基（No.4）には「弘安四年」—(1281年)と刻まれている。碑の高さ195cm、巾147cm。

弘安の碑 No. 5, No. 6

位 置 河北町合戦谷（旧坂野川町），町の北1.5km

概 説 合戦谷境下に2基立つ。1基（No.4）は「弘安五年七月廿二日」—(1282年)と刻まれている。碑高180cm、巾80cm。1基No.6は「弘安八年乙酉二月」—(1285年)と刻まれる。碑の高さ150cm、巾150cm。

弘安の碑 No. 7

位 置 河北町尾崎（旧大川村），町の東約16km

概 説 海藏庵裏山登り口に見られる。通称「頼朝の墓」と言われる古碑で「弘安十年二月十五日」—(1287年)と刻まれている。碑の高さ115cm、巾60cm。

しょうこう

正応の碑 No. 1, No. 2

位 置 河北町持領（旧二俣村），町の南東約3km

概 説 高徳寺参道入口右側沢ふちに立つ。

1基（No.1）は碑面の苔が厚く、永い年月風雨にさらされ「正應四年十月」—（1291年）のみ判読できるが他は不明。碑の高さ196cm、巾61cm。正面に五輪塔が刻まれる。さらに1基（No.2）は前碑の向い、参道左側に倒れている。「正應五年中冬廿日」—（1292年）と刻まれている。碑の高さ170cm、巾90cm。



正応の碑 No. 3 (河北町倉迫)

正応の碑 No. 3

位 置 河北町倉迫（旧二俣村），町の南西約4km

概 説 倉迫バス停留所後の丘にある古碑群の中の1基。

碑面に「正應二年二月二十八日」—（1289年）とある。碑の高さ84cm、巾23cm。



正応の碑 No. 1 (河北町持領)

正安の碑 No. 1

位 置 河北町崎山（旧大谷地村），町の西南3km

概 説 赤山公園内にあり、「正安三年十一月二十日」—(1301年)と刻まれている。碑の高さ90cm,巾35cm。

正安の碑 No. 2

位 置 河北町大福地（旧大川村），町の東約6km

概 説 大福地千照寺参道入口左側に立つ。「正安二年八月」—(1300年)と刻れている。高さ 126cm,巾144cm。



正 安 の 碑 No. 1 (河北町 崎山)



正 安 の 碑 No. 2 (河北町 大福地)

正安の碑 No. 3

位 置 河北町持領（旧二保村），町の南東約3km

概 説 持領地区内の山林地にある。「正安四年壬寅九月十五日」—(1302年)と刻まれている。高さ146cm,巾105cmの磨(崖)碑。

嘉元の碑 No. 1, No. 2

位 置 河北町上納（旧飯野川町），町の西南約1.5km

概 説 桜井隆太郎氏宅地内に2基立つ。

1基（No.1）には「嘉元二年十一月」—（1304年）と刻まれている。高さ250cm，巾78cm。さらに1基（No.2）には嘉元三年乙巳二月」—（1305年）と刻まれている。高さ50cm，巾55cm。この碑は2基とも古くは舟形山東方の畠地内にあったのを近年この地に移した，と旧記は伝える。

嘉元の碑 No. 3

位 置 河北町五十五人（旧大谷地村），町の西約5km

概 説 五十五人地区内廣幡八幡神社境内に立つ。「嘉元三年六月廿日」—（1305年）と刻まれる。高さ200cm，巾70cm，厚さ20cm。この碑は後年どこからかこの地に運び移したものと考えられる。

嘉元の碑 No. 4

位 置 河北町尾崎（旧大川村），町の東16km

概 説 尾崎地区内海藏庵境内に立つ。「嘉元四年四月二日」—（1306年）と刻まれている。高さ84cm，巾68cm。



嘉 元 の 碑 No. 1 (河北町 上納)

延慶の碑

位 置 河北町中島（旧飯野川町），町の北約3km

概 説 中島の伊藤清助氏宅裏山に見られる。「延慶四年七月十三日」—（1311年）と刻まれている。碑面の磨滅は少なく、文字は明瞭に読みとれる。高さ143cm，巾57cmでやや大きな供養碑。正面には五輪塔が刻まれている。



延 廣 の 碑 (河北町 中島)

正和の碑

位置 河北町東福田（旧二俣村）。町の南約4km

概説 東福田小枝の鈴木清夫氏宅地内に立っている。碑には五輪塔の刻みがあり、「正和四年乙卯六月十二日」—（1315年）と記されている。碑の高さ71cm、巾21cm。

文保の碑

位置 河北町飯野本地（旧大谷地村）。町の西北約4.0km

概説 飯野山神社境内に立つ古碑の一つで、「文保三年乙未三月三日」—（1319年）と刻まれている。碑の高さ80cm、巾40cm。



文保の碑（河北町飯野本地）

元応の碑

位置 河北町竹迫（旧二俣村）。町の東南約2km

概説 竹迫公民館裏に立つ古碑で、「元應二年六月廿六日」—（1320年）と刻まれている。碑の高さ158m、巾52cm、厚さ8cm。近年砂防工事のとき、附近大沢より掘り起こしたものを見地に移したのだという。碑面は滑らかで磨いたようで、少しの苔もなく、文字も明瞭に読みとれる。



元応の碑（河北町竹迫）

けんこう
元亨の碑 No. 1

位 置 河北町成田（旧飯野川町），町の中心部

概 説 成田の山内喜勝治氏宅地内に立つ。

昔ここに小さな塚があり、明神を祭ったため小塚明神と呼ばれた。これが「小塚」なる地名の起源である。この塚上に古碑が3基あって、その中の1基がこの碑である。今は苔碑となり判読しにくい。「元亨二年十一月二十二日」—（1322年）と刻まれている。高さ155cm，巾47cm。

元亨の碑 No. 2

位 置 河北町大森（旧二俣村），町の南約2km

概 説 大森地区八幡神社登り口左側に立つ古碑。「元亨二年十一月十日」—（1322年）と刻まれている。高さ125cm，巾53cm，この碑は後世になって、ここに移されたものと推定される。

元亨の碑 No. 3

位 置 河北町岩崎（旧大谷地村），町の西北約3km

概 説 岩崎地区内佐々木丈一氏宅地裏に立つ。

「元亨元年十一月二十九日」—（1321年）と刻まれる。碑の高さ67cm，巾36cmのさきやかな板碑で、折損している。近年隣地の池をさらった時掘り起こしたものという。



元 亨 の 碑 No. 1 (河北町 成田)

正中の碑 No. 1, No. 2

位 置 河北町持領（旧二俣村），町の東南約3km

概 説 高徳寺境内に立つ古碑で、1基（No.1）には、「正中二年乙丑二月平直重逆修造立者也」—（1325年）と刻まれている。これは旧記にも見られ、広く知られた碑である。しかし平直重なる人物については知り得ない。碑の高さ122cm、巾62cm、厚さ8cm。同寺境内に立つもう1基（No.2）の古碑には、「正中二年二月廿日」—（1325年）と刻まれている。高さ94cm、巾54cm。



正 中 の 碑 No. 1 (河北町 持領)

嘉曆の碑 No. 1

位 置 河北町北境（旧二俣村），町の南西約5km

概 説 法華堂内に安置されている古碑で、「嘉曆大歲二年十月」—（1327年）と刻まれている。碑の高さ330cm、巾98cm、厚さ9~12cm。町内第一の巨大な供養碑で、當時日蓮の孫弟子に当る日昌が、当地に来て百ヶ目の布教をなし、毎日一枚づつ南無妙法蓮華經のお題目を書いたという。この碑にも南無妙法蓮華經の文字があざやかに刻まれている。それにちなみ、北境、倉迫、東福田地区には50基近くの日蓮宗の古碑が残されているのだと言う。



嘉曆の碑 No. 1 (河北町 北境)

嘉曆の碑 No. 2

位 置 河北町吉野（旧大谷地村），町の西北約3km

概 説 飯野山神社境内に立つ古碑で、「嘉曆三年戊辰九月二日」—（1328年）と刻まれる。高さ87cm，巾40cm。この碑は古くから里人が邦良親王の碑と伝え、尊崇してきたものである。もと中里地区にあったのを現位置に移した、ともいう。隣にある一皇子社は親王を祀ったものという。又、吉野の集落には、屋敷名、小路名等、往時を偲ばせる数々の由緒が残っているが、実証する記録は何一つない。

嘉曆の碑 No. 3, No. 4, No. 5, No. 6, No. 7

位 置 河北町尾崎（旧大川村），町の東約16km

概 説 海藏庵境内参道入口には嘉曆の碑、次の6基が立つ。

(No.3) は「嘉曆二年四月廿二日」—（1327年）と刻まれる。高さ108cm，巾48cm。

(No.4) は「嘉曆三天戌辰卯日」—（1328年）と刻まれる。高さ77cm，巾32cm。

(No.5) は「嘉曆二年二月」—（1327年）と刻まれる。高さ73cm，巾36cm。

(No.6) は「嘉曆三年四月廿日」—（1328年）と刻まれる。高さ103cm，巾49cm。

(No.7) は「嘉曆三年」—（1329年）と刻まれる。高さ108cm，巾48cm。

嘉曆の碑 No. 8

位 置 河北町尾崎（旧大川村），町の東約16km

概 説 尾崎地区鍛冶間の江畔に立つ。「嘉曆三年」—（1329年）と刻まれる。高さ136cm，巾44cm。

嘉曆の碑 No. 9, No.10, No.11

位 置 河北町倉の迫（旧二俣村），町の南西約4km

概 説 倉の迫バス停留所後の丘に次の3基の嘉曆の碑が立つ。

(No.9) は「嘉曆二年丁卯九月十九日」—（1327年）と刻まれる。高さ128cm，巾62cm。

(No.10) は「嘉曆三年戌辰月十七日」—（1328年）と刻まれる。高さ80cm，巾45cm。

(No.11) は「嘉曆三年八月十七日」—（1328年）と刻まれる。高さ80cm，巾45cm。

嘉曆の碑 No.12

位 置 河北町成田（旧飯野川町），町の中央部

概 説 成田の西城一郎氏宅の裏山に立つ。「嘉曆二年十二月十日」—（1327年）と刻まれる。高さ110cm，巾140cm。

嘉曆の碑 No.13

位 置 河北町東福田（旧二俣村），町の西南約4km

概 説 同地の旧社地内に立つ。「嘉曆四年」—（1329年）と刻まれる。高さ90cm，巾45cm。



嘉曆の碑 No. 2 (河北町吉野)

(元徳の碑)

元徳の碑 No. 1, No. 2

位 置 河北町北境（旧二俣村），町の南西約5km

概 説 北境の法華堂社地内に2基の元徳の碑が立つ。1基（No.1）には「南無妙法蓮華經，元徳二年六月四日」—（1330年）と刻まれている。高さ108cm，巾30cm。1基（No.2）には「元徳四年十月廿三日」—（1332年）と刻まれている。高さ216cm，巾23cm。

(元弘の碑)

元弘の碑 No. 1, No. 2

位 置 河北町北境（旧二俣村），町の南西約5km

概 説 北境の法華堂社地内に2基の元弘の碑が立つ。1基（No.1）には「南無妙法蓮華經，元弘二年十月十九日」—（1332年）と刻まれている。高さ131cm，巾29cm。1基（No.2）の方には「南無妙法蓮華經，元弘四年三月」—（1334年）と刻まれている。高さ130cm，巾38cm。

元 弘 の 碑 No. 3 (河北町 尾崎)



元弘の碑 No. 3

位 置 河北町尾崎（旧大川村），町の東約16km

概 説 尾崎の久須神社境内に立っている。「元弘三年」—（1333年）と刻まれている。高さ52cm，巾37cm。

元弘の碑 No. 4

位 置 河北町境（旧飯野川町），町の西1.5km

概 説 境の共同墓地の中，宮川進氏墓地内に立っている。元弘四年甲戌二月十三日—（1334年）と刻まれている。高さ65cm，巾35cm。

◎ 元弘は南朝年号

正慶の碑

位置 河北町北境（旧二俣村），町の南西約5km

概説 北境の法華堂社地内に立つ。「南無妙法蓮華經，正慶二年七月九日」—（1333年）と刻まれている。高さ67cm，巾20cm。
〔註〕正慶は北朝年号

建武の碑 No. 1

位置 河北町馬鞍（旧坂野川町），町の東北約6km

概説 馬鞍の立石にあり，古くから「立石の碑」として知られる。正中年間（1324年頃）馬鞍地区に初めて入植した4人の人達によって建てられた供養碑だと伝わる。風雨にさらされ苔碑となっているため，文字の判読も定かでない。近年は覆を設け保護が加えられた。碑面には「南無阿弥陀仏 建武二年四月十六日」—（1335年）と刻まれている。高さ310cm，巾120cm，磨崖碑形式の珍奇なもので時宗に関係があるとも言われ注目に値する。

建武の碑 No. 2,

位置 河北町北境（旧二俣村），町の南西約5km

概説 北境の法華堂社地内に1基の建武の碑が立っていて「南無妙法蓮華經，建武元年大戊甲戌三月十三日」—（1334年）と刻まれる。高さ115cm，巾40cm。

建武の碑 No. 3

位置 河北町倉迫（旧二俣村），町の南西約4km

概説 倉迫のバス停留所後の丘の上に立つ。「建武二年二月廿五日教白」—（1335年）と刻まれている。高さ86cm，巾19cm。

建武の碑 No. 4

位置 河北町成田（旧坂野川町），町の中央部

概説 成田の佐々木範夫氏宅地内に立っている。「建武二年乙卯八日廿九日」—（1335年）と刻まれている。高さ115cm，巾39cm。

〔註〕建武は南朝年号



正慶の碑（河北町北境）



建武の碑（河北町馬鞍）

慶長の碑 No. 1, No. 2

位 置 河北町長面（旧大川村），町の東約15km

概 説 長面竜谷院の境内に2基の慶長の碑が立っている。慶長年間の碑は珍しく、県下に数基しか残っていないとされている。昔の龍谷院の跡だと伝えられる蛇沼のほとりから近年掘り起こされ、ここに移したものだという。1基（No.1）は高さ130cm、巾45cm、厚さ4cm。慶長五年一（1600年）と刻まれている。1基（No.2）は高さ198cm、巾27cm、さ厚22cm。慶長十七年一（1612年）と刻まれている。



慶長の碑に見られる梵字（河北町長面）



慶長の碑 No. 1, No. 2 (河北町長面)

古碑群

その1、合戦谷

位 置 河北町合戦谷（旧飯野川町）、町の北約6km

概 説 合戦谷の古碑群は俗称「壇の下」という所にある。合戦谷地区は平安初期の蝦夷征伐のときの激戦地だったようで、遺物としてはこの他に7、8個の石塚があり、現に1個残存している。又、南北朝時代に入ると石巻の葛西氏の南朝軍と、大崎氏北朝軍とが、この附近でしばしば激突を繰返した、いわばこの地は両勢力の接触点でもあった。現存する古碑群はそのときの戦死者の供養碑と推定される。弘安の古碑も2基あるが、多くは、康永、貞治、至徳、応永等、南北朝時代のものが多く、20数基が1ヶ所にまとめられている。もと地下に埋まっていたものを大正年中、土地造成の折、掘り起したものである。

(註 埋蔵遺物については別記参照)



古碑群 その1 (河北町合戦谷)

その2 北境

位置 河北町北境（旧二俣村），町の南西約5km

概説 北境停留所うしろの法華堂と、千葉兵衛氏宅の法華堂と2ヶ所に古碑群が見られる。鎌倉時代、日蓮の孫弟子が来て百ヶ日の布教をしたというから、法華堂もこの当時から建っていたと想像される。この地には両所合わせて20数基の供養碑が残されている。古いのは弘安のものであるが、嘉暦、元徳、建武等の鎌倉末期から南北朝にかけての供養碑が多い。

その3 倉迫

位置 河北町倉迫（旧二俣村），町の南西約4km

概説 倉迫の供養碑群も北境のものと同じく日蓮に関わるもののように、主として嘉暦、建武等鎌倉末期から南北朝にかけてのものが多い。とくに興味をひくのは、年号ではなく、碑面に「南無妙法蓮華經」とのみ刻んだもの、又五輪塔を刻み、この中に「南無妙法蓮華經」と刻んだもの等が見られる点である。この古碑群は此所から50m位離れた付近へ山上から砂と共に崩れ落ちて埋まっていたのを、地主が見つけ、まとめて現在の所に建てたのだという。



古碑群 その2 (河北町 北境)



古碑群 その3 (河北町 倉迫)

その4 尾崎

位 置 河北町尾崎（旧大川村），町の東約16km

概 説 この古碑群は海蔵庵入口参道に並んでたっている。しかし元は寺の裏山の古い墓地にあったのを現在の場所に移したものである。現在は20数基も立っているが、裏山にのぼると半ば埋まって頭部だけ見えるものなど、いくつかが見られる。古くは建治、弘安、嘉歎など鎌倉時代のもの、貞治などの南北朝暦年のものが多い。発掘すれば更に多くの古碑が現われるであろう。この土地は追波湾に面した港であり、そして平泉への交通路の入口でもあった。往古は彼の地を目ざす武士の落人や、商人などの出入が多くなされたのは当然であったろう。この古碑群はそれらの人々の信仰に、或は供養に関わる遺跡だったのかも知れない。中でも里人が言い伝えてある「源頼朝の墓」と称される供養碑に興味がひかれる。この碑は弘安の年号であるが、墓石に屋根のよう蓋石があり、両側には側壁の石が設けられている。また下段には家臣の者の碑と称するものが一列に並び、半ば地下に埋もれている。



古 碑 群 その4 (河北町 尾崎)

古 墳 群

古 墓 群

位 置 河北町中島（旧飯野川町）、町の北約3km

概 説 同地の和泉沢細、高橋利男氏宅裏の山麓丘陵地、標高10mの雜木林の中に50基以上の古墳群が原型を止めている。外觀は積石塚状の円墳であるが、その大きさは不定で、大きいものでは直径8m、高さ1.5mに達するものもある。

安政4年（1857年）と、明治44年（1911年）に屋敷続きの土地を造成した際、石棺を堀りあて、刀剣（わらび手刀）を4振出土した。それが地主の高橋氏宅に現在も保存されている（註「埋藏物」の項参照）。ともあれ、古くより蝦夷征伐時の武将か、当地の豪族の墓と推定されて来た。

昭和47年1月、東北大名譽教授伊東信雄氏に下調査を依頼したが、その結果、この古墳群の時代は奈良時代（8世紀頃）のものだ、との確証を得た。次で昭和47年度中には本格的な発掘を行う予定になっている。

今はかかる數十基もの古墳が、殆ど昔そのままの姿で保存されているのは県内では稀だとされ、その発掘に大きな期待が寄せられている。

一応、假称は「和泉沢古墳群」と呼ばれているが、本格的発掘調査の結果、人骨、副葬品である曲玉、切子玉それに武器の類の出土が予想され、将来この古墳群は当地方古代文化解明の鍵を握るものとして、史界の脚光を浴びるにいたるは必定であろう。



古 墓 群一外 観 (河北町 中島)



古 墓 群一内部本体の石組みの一例
(河北町 中島)

墓碑



小僧丸の墓（河北町辻堂）

小僧丸の墓

位 置 河北町辻堂（旧二俣村）、町の東南約1km

概 説 碑の高さ150cm、巾70cm。伊達郡二本松の城主伊達植宗（政宗の曾祖父）の子義宣の墓である。時あたかも戦国期、伊達家に内訌があり、父子兄弟二派に分れて相争うことになる。義宣はさきに大崎氏の養子となっていたが、大崎氏も又伊達氏の争いの渦に巻きこまれて二派となる。植宗派の勢は弱く、父に味方した義宣の身辺は危険となったので、難を逃れて兄晴崩（登米の葛西氏の養嗣子）を頼ろうと石巻に落ちる途中、刺客に襲われ、この地に斃れた時に天文19年（1550年）5月、義宣行年25才であった。義宣は仙台藩政宗の大叔父に当る。よって後年、政宗が義宣のために此の地に墓碑を建てて供養をした。それには寛永五年戊辰五月（1628年）と刻まれていたという。その碑は何時のことか不明だが、水害にあってなくなったので、のち大森区建立寺の住職鳳林和尚が再建したのが現在の碑である。碑の正面には「玉龍院殿輝山道宣大居士」、右側に「丑年三月七日小僧丸義宣墓」左側に「奉依国命造立石碑以法事修行、建立寺十二世鳳林謹記」と書かれている。

曰人の句碑

位 置 河北町合戦谷（旧飯野川町）、町の北約6km

概 説 曰人の句碑でもあり頌徳碑でもある。高さ280cm、巾100cm。桃生町給入町の生れ、仙台藩の大番士、遠藤伊豆之介は東北の俳聖と称され、「曰人」と号した。この碑には「芒野やこの四、五日は日もくれず」の曰人の句と共に、曰人の経歴が詳しく刻まれている。当時桃生郡北方の大肝入であつた曰人の高弟、高橋（現立花）太郎衛門信芳（俳名、丈葉）が、弟子達と共に師を慕い、その徳をたたえて建立したものという。天保末年か弘化年間頃の建立か？。

曰人の碑（河北町合戦谷）



江戸初期開墾記念碑

位 置 河北町境（旧飯野川町）、町の北西約2km

概 説 高さ230cm、巾60cm。建立は元和五年五月二十日(1619年)慶長、元和年間、相野谷、成田、飯野の野谷地を開田した記録が、文官に等しい庶民の手で素朴に彫り刻まれている。民俗資料として貴重なものと評価されている。
◎河北地区文化財に指定。



開 墾 記 念 碑 (河北町境)

神像



加茂建角見命像 (河北町 福地)

おどの 賀茂小銳神社神像

位 置 河北町大福地（旧大川村），町の東約6km

概 説 延喜式内社。賀茂小銳神社に七体の神像が安置されている。

○ 神像名並びに外観

[加茂建角見命]

総丈50cm、胸巾16cm、袖巾18cm、厚さ10.5cm。

[加茂別雷命]

総丈49.5cm、胸巾12cm、袖巾16.5cm、厚さ9.5cm。

[隨神その1]

総丈39.5cm、胸巾16.5cm、袖巾18.0cm、厚さ10.8cm。

[隨神その2]

総丈40.0cm、胸巾15.5cm、袖巾17.5cm、厚さ9.8cm。

[隨神その3]

総丈35.0cm、胸巾12.5cm、袖巾12.5cm、厚さ6.0cm。



加茂別雷命像 (河北町 福地)



隨神像 その1 (河北町 福地)



隨 神 像 その2 (河北町 福地)

何れもカツラ材、木彫一本造り立像。

◎ 時代

平安末期～鎌倉初期（1100～1200年）の作品。

◎ 作者

不明。

◎ 誌

神像七体の中、前記五体が昭和30年、県重要文化財の指定をうけ、手厚い保護が加えられている。



隨 神 像 その3 (河北町 福地)

佛 像

十一面觀音立像

位 置 河北町振の内（旧二俣村）。町の東南約3km

概 説 堀の内觀音堂に本尊は他の二体の脇仏と共に安置されている。

○ 仏像名並びに外観

〔十一面觀音（本尊）〕

総丈132cm。

〔增長天立像（脇仏）〕

総丈100cm、足上82cm。

〔毘沙門天立像（脇仏）〕

総丈68cm。

何れも木彫一本造り。永い風雪をへたため腐朽が甚だしく、形も大部変わっている。

○ 時代 平安時代（1000年頃）の作。

○ 作者 不明。

○ 註 上記三体は町文化財に指定された。この地方900年前の仏教文化を知る貴重な資料である。



堀の内の觀音堂（河北町堀の内）



十一面觀音像 (河北町堀の内)



毘沙門天像 (脇佛) (河北町堀の内)



増長天像 (脇佛) (河北町堀の内)

誕生仏立像

位置 河北町中島（旧飯野川町），町の北约3km

概説 中島の天星寺に所蔵されている。

○外観 総丈7cm，錫銅造り，立像。

○時代 平安末期（1100年頃）の作。

○作者 不明。



誕 生 佛 像 (河北町 中島)

報身如来(阿弥陀如来)立像

位置 河北町横川（旧大川村），町の東約8km

概説 横川の大忍寺の御本尊である。

○外観 総丈78cm，面長8.5cm，面横8.5cm。木刻一木造り立像。

○時代 鎌倉時代（1300年頃）の作。

○作者 不明。

一説に惠心僧都の作とも、京仏師の手になると
も言われる格調高い仏像である。

○註 古くより横川如来として名高い。



報 身 如 来 像 (河北町 横川)



延命地藏像 (河北町飯野)

延命地藏坐像

位 置 河北町飯野（旧大谷地村），町の西北約4km

概 説 飯野の光巌寺に所蔵されている。

○外観 縦丈35cm、木刻、寄木造り。坐像。

○時代 室町末期弘治3年(1557年)の作と伝わる。

○作者 不明。



あみだによらい らいこうぶつ

阿弥陀如来立像、並に来迎仏立像

位 置 河北町上垣（旧二俣村），町の東南約4km

概 説 全隆寺内に安置されている。

○仏像名とその外観

〔阿弥陀如来像（本尊）〕

縦丈86.0cm。台座上76cm。

〔来迎仏像（脇仏）〕

縦丈79.5cm、台座上56.5cm。

何れも木刻、寄木造り、立像。

○時代 (1) 阿弥陀如来像は室町末期(1500年頃)の作。

(2) 来迎仏像は南北朝時代(1370年頃)の作。

○作者 不明。

○註

阿弥陀如来像(左) (河北町 上垣)

来迎仏像(脇佛)(右) (河北町 上垣)



阿弥陀如来像（河北町日影）

阿弥陀如来立像

位 置 河北町日影（旧飯野川町），町の東北約1km

概 説 日影の源光寺の御本尊である。

○外観 総丈59.5cm、木刻、寄木造り、立像。

○時代 室町初期（1400年頃）の作。



のうけぶつ 能化仏(阿弥陀如来)坐像

位 置 河北町成田（旧飯野川町），町の北約0.5km

概 説 成田地区の阿部健夫氏所蔵。

○外観 総丈39cm、台座上19.5cm、木刻、寄木造り坐像。

○時代 室町末期（1500年頃）の作。

○註 寛永年間（1625年頃）能化上人なる行者の持参せる仏像だと伝わる。この人は合戦谷峠に堤防を築き山水をひきとめ、成田地区的水害を救った奇特の僧であつたという。

能化佛像（河北町成田）

埋 藏 遺 物

わらびて

蕨手の刀 No. 1

位 置 河北町飯野本地（旧大谷地村），町の西北約4.0km

概 説 飯野山神社の宝物庫に収納保管されている。天明2年（1782年）6月23日旧飯野村東屋敷在住の百姓兵吉が、同所の裏山より掘り出したものだという。初め光巣寺に奉納せるも、のち文政10年（1827年）4月3日飯野山神社に移し、現在にいたっている。

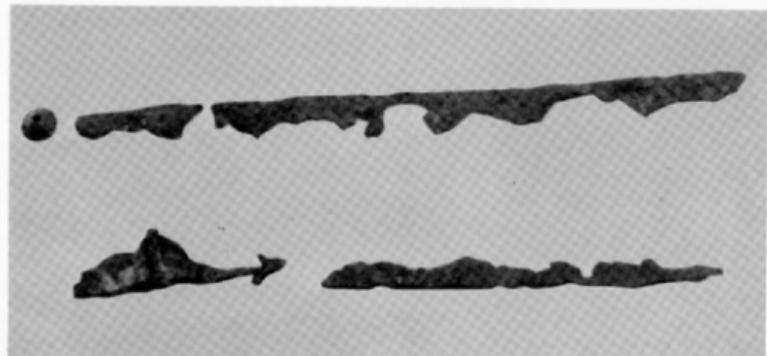
◎外観

総長	59.4cm	柄	12.5cm
鈎怪	6.7cm	刀身	43.7cm
刀巾	4cm	刀厚	0.6cm

腐蝕甚だしいが、概ね原型をととのえている。



蕨手の刀 No. 1 (河北町飯野本地)



蕨手の刀 No. 2, No. 3 (河北町 中島)

まがたま 曲玉と切子玉

位置 河北町合戰谷（旧飯野川町），町の北約6km

概説 同地の立花忠信氏所蔵。曲玉は大正初年、同家の宅地造成の際、壇の下闈（地名）から出土せるもの。切子玉は昭和21年に同家物置を移転せる際、同宅地より発見せるものである。

○外観

曲 王 那羅製 何れも長さ約4回

由 1 cm 位。 大小 3 個。

切子玉 水晶製 長さ2.6cm

由 1.8cmのtの 1個。

◎註 古代（奈良朝時代）豪族の婦人の装身具である。



曲玉と切子玉

(河北町合戰谷)

ぬのめ　は　じ
布目瓦，土師器

位 置 河北町飯野（旧大谷地村），町の西北約4km

概 説 同地の長者森に於て、袖、阿部、遠藤氏らの手により発掘、発見されたもの。現在は同地の袖孝義氏宅（布目瓦、土師器一壺）大谷地小学校（布目瓦）及び遠藤八雄氏宅（土師器一食器など）に保管されている。

○外観

布目瓦（軒平瓦） 3枚

土師器（蓋付碗） 4個

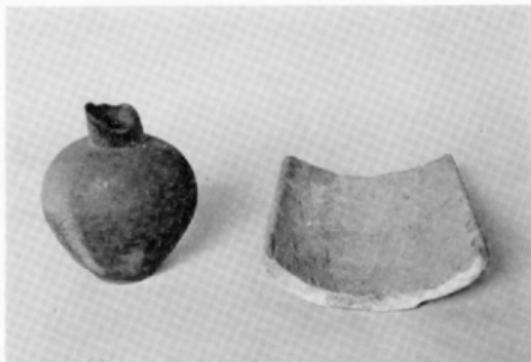
土師器（壺） 1個

（型、寸法については略図参照のこと）

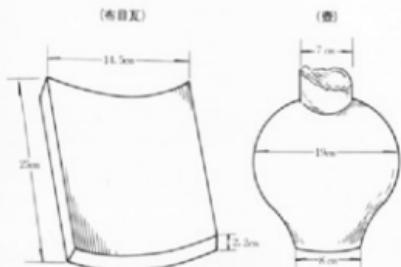
◎註 8～9世紀頃（奈良朝時代～平安時代前期）のものと推定されている。これらの出土品は、往古の桃生城（櫛）の所在に関連あるものとして、この地はにわかに世の注目を浴びるに至った。

参考

河北町飯野川地区の中島、或は大川地区的尾崎、針闘浦部落の一画より縄文期土器が発掘されている。但し、規模は極めて小さく、出土品もわずかであるので本稿ではとり上げないでおく。



瓦・土師器・型寸法略図



布目瓦と土師器（河北町飯野）

土師器類（碗その他）（河北町飯野）

建築

かえるまた こうりょう
蛙股 No.1と紅梁

位置 河北町日影（旧飯野川町），町の北約1km

概説 日影の薬師堂（高橋松雄氏所有）に見られる。

◎様式 薬師堂の社殿は宝永元年（1704年）7月に建築されたもので特筆すべき古きではない。しかし、蛙股と紅梁は建築様式としては珍重すべきものである。

◎註 (イ) 蛙股とは社殿の軒庇の正面に見られる飾り物で、時代が新しくなる程、精巧な彫りものとなる。紅梁は同軒庇の梁木の意である。



薬師堂の蛙股（河北町日影）



薬師堂の紅梁（河北町日影）



飯野山神社の紅梁 (河北町飯野本地)

紅 梁 No. 2

位 置 河北町飯野本地(旧大谷地村), 町の西北4.0 km

概 説 飯野山神社の建築の一部。

◎様式 神社の社殿、軒庇の紅梁も又珍重なもの
である。

建 具、器 物

板 戸 No. 1

位 置 河北町小福地（旧大川村），町の東約6km。紫桃植氏所蔵

概 説 杉板戸は当時を偲ぶ民俗資料として貴重である。
◎時代 宝暦年間（1760年頃）の作。

板 戸 No. 2

位 置 河北町皿貝（旧飯野川町），町の東北約5km

概 説 生出久男氏所蔵。
◎杉板戸 当時を偲ぶ民俗資料として貴重である。
◎時代 享保年間（1720年頃）の作。



船 節 箱 No. 1 (河北町 尾崎)



船 節 箱 No. 2 (河北町 尾崎)

たんす 船箪笥 No. 1, No. 2

位 置 河北町尾崎（旧大川村），町の東約16km

概 説 尾崎地区の木村仁男氏宅にNo.1、浜畠久一氏宅にNo.2などが所蔵されている。
◎民俗史料、或は水運交通史資料として貴重なものである。。
◎時代 江戸時代末期（1800年代）の作。

文書



立花氏文書——伊達輝宗書状その1 (河北町田屋敷)

書簡及び書物

位置 河北町田屋敷（旧飯野川），町の中心部

概說 立花改進氏所藏

- ◎伊達輝宗書簡 2通

(1)時代 室町末期(1500年頃)

(2)参考 出所正確、筆跡、花押など県美術館鑑定済み。

◎林子平書物一巻

(1)時代 江戸末期(1800年頃)

(2)参考 出所正確、筆跡、花押などにつき県美術館にて鑑定済み。



立花氏文書——伊達輝宗書状その2 (河北町旧屋敷)

無形文化財

法印神楽

位 置 河北町皿貝（旧坂野川），町の東北約5km

概 説

- ◎由緒 旧中津山村の良寿院修験大館淹本坊と。皿貝村成就院の修験6世久峯重光が、天和2年（1682年）8月、聖護院門主宮様御入峯のとき、彼地にて御能を修得し来り、これを原型として古事記を台本となし、創作されたのが桃生神樂の嚆矢だと言う。のち法印（修験）達に伝えられ、祭礼の時には神前に奉納するのが習わしとなり、後世これを法印神樂と称した。
- ◎変遷 皿貝の法印神樂については明治以前は法印の数も多く、神儀祭典には不可分の行事として大いに榮え、一世を風靡した。明治に入るや神仏分離となり、離転職する法印あとを断たず、ために神樂は衰退の一途をたどる運命となり、法印神樂の存続は危殆に瀕した。時に成就院の末裔、大日靈神社の神職2代目、及川友世はこれを憂い、その子達治郎以下代々子孫に相伝えしめた。のち実技は部落の青年たちに伝承され、今日尚その伝統は皿貝の地に生き続けている。
- ◎様式 神社の祭典には社前に舞台を造り、四隅に柱を立て、三方には吹き流しと忌竹をたてる。囃太鼓と六孔の笛で銅鑼拍子をとる。舞人は「ちはや」という長振袖に袴をはき、仮面を冠って帶刀なし、白扇をもち神詞と言う神樂詞をとなえ仕舞となる。勇壮なるもの、優美なるもの、壯麗なるものなど、番数は三十三番にも及ぶと言う。

参考

法印神樂はその他、河北町大川地区にも伝承されている。福地（賀茂小鏡神社）、針岡（羽黒神社）、釜谷、長面（稻荷神社、北野神社）の氏子たちにより上演奉納されるものである。しかし、昭和初年に相伝、導入されたと聞くのでその歴史は新しい。それぞれともに、かつては祭儀には不可分の行事として大いに盛んをきわめた。特に福地の神樂は迫真力あるダイナミックな演舞として大いに衆目を集めしたものである。戦後は各地とともに急速に衰退し、実演者も數名の老人たちに限られるようになつた。今はもはや消滅に近いのが現状であろう。



法印神楽 その1 (河北町 皿貝)



法印神楽 その2 (河北町 皿貝)



法印神楽 その3 (河北町 皿貝)

古木

その1 根上りの大桜

位 置 河北町（旧大川村），町の東約8km

概 説 横川八幡神社境内にある。樹令凡そ700年、根
廻り6m、目通り5m、樹枝の広がり18m四方。



古木その1 横川根上り大桜（河北町 横川）



古木その1 横川根上り大桜（河北町 横川）

その2 赤松

位 置 河北町大福地（旧大川村），町の東約6km

概 説 大福地の賀茂小鏡神社境内にある。樹令凡そ
500年、根廻り4m、四方、目通り3.7m、樹高28m、
樹枝の広がり18m。

その3 榛

位 置 河北町尾崎（旧大川村），町の東約16km

概 説 尾崎の海蔵庵境内にある。樹齢凡そ500年，根
廻り5m，目通り4.7m，樹高16m，樹枝の広がり
15m四方。

古木 その3 榛 (河北町 尾崎)



その4 榛

位 置 河北町馬鞍（旧飯野田町），町の東北約6km

概 説 馬鞍の天神社境内にある。樹齢凡そ400年，根
廻り4.5m，目通り4.2m，樹高20m，樹枝の広がり
20m四方。

古木 その4 榛 (河北町 馬鞍)



その 5 檜

位 置 河北町中島（旧飯野川町），町の北部約3km

概 説 中島の天星寺境内にある。

樹令凡そ400年，根廻り4.6m，目通り4.5m，樹高30m，樹枝の広がり20m。

その 6 檜

位 置 河北町飯野新田（旧大谷地村），町の北西約4km

概 説 千葉忠喜氏宅地内にある。

樹令凡そ400年，根廻り4.75m，目通り4.70m，樹高30m，樹枝の広がり25m。

その 7 檜

位 置 河北町日影（旧飯野川町），町の北約1km

概 説 源光寺境内に立つ。樹令凡そ400年，根廻り

4.50m，目通り4.0m，樹高30m，樹枝の広がり20m。



古木 その 5 檜 (河北町 中島)



古木 その 6 檜 (河北町飯野新田)



古木 その 7 檜 (河北町 日影)

交通史跡

袖の渡り

位置 河北町横川（旧大川村），町の東約8km
北上町本地（旧橋浦村），町の西南約6km

概説 往古、北上川を横ぎり渡った横川～本地間の津渡（渡し場）である。

「福地村誌」には——袖の渡りは北上川岸、本村西の町頭にあり、古くはここより同郡橋浦村袖山に渡りし所なり。此所に松樹2本あり、1本は「袖の松」といい直立中天に登り尺丈量るに難しと言ひしも、天保年間（1830年頃）雷火に焼け今にその根8尺余残れり。

1本は「二葉松」といひ圍り3丈、高さ7丈余、その枝の広がり1町四方、月夜も闇の如し。賞讃すべき松なりしが慶応2年（1866年）9月の大風に倒れたり。情可——云々とある。尚、北岸橋浦村側には昔八幡太郎義家が鏡の袖を残した古事に由来する（註 馬鞍の鞍かけ島の伝説と一对となる）「衣袖山」、「涙川」などの地名がのこり、古くより名所として知られて來た。「封内名蹟誌」

にも——袖の渡り橋浦村にあり、橋浦の津渡なり。河辺に山あり衣袖嶺という。山下の水流を涙川と名く——云々とある。

次に「袖の渡り」の古歌として数首あるのでその1～2を紹介しておくる。

（從二位行家卿の歌）

涙川浅き瀬ぞなきみちのくの

袖の渡りに測はあれども

（新後選拾遺集恋一より、相模の歌）

みちのくの袖の渡りの涙川

心中に流れぞすむ。

◎註 石巻市住吉神社前にも「袖の渡り」と言う同名の古津渡あり、ここは芭蕉の「奥の細道」でも有名である。しかし、古歌に伝わる「袖の渡り」はわが郷土のものが正しい。



袖の渡り（河北町横川 北上町本地）

自 然

北 上 川

位 置 河北町一円

概 説 わが国有数の河川である。河北町のほぼ中央を流れ、北上町の立神で海に注ぐ。常に水は清潔で水量も豊富である。飯野川橋上流、合戦谷峠の眺め、或いは河北町内の沃野の中を洋々として流れる雄姿は、常に詩情を湛え、まさに絶賛の風景を形づくる。河川の水は飲料水や用水に使用される以外に、近くは工業用水として利用されることになろう。この川で産する鮭、鰯、すずきなどはその味のよろしきを以て、世に賞されている。そのため、魚介類、動植物の棲息、且繁茂地として、向後もその利用と保護につとめねばならない。現在新しくダムが建設中であるが、完成の暁には観光地としても脚光を浴びることになろう。

こうぞう 長面海岸と弘象山

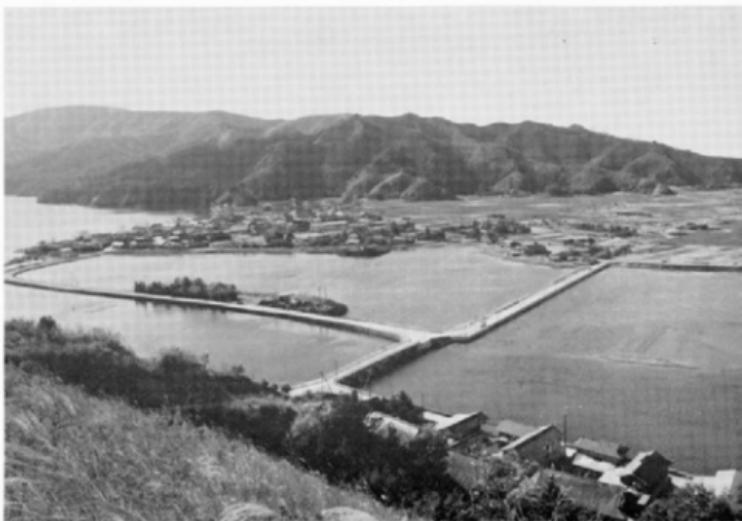
位 置 河北町東部海岸地帯（旧大川村）、町の東約16km

概 説 長面海岸は追波湾に面した白砂青松の地である。海水は清澄で海は遠浅、夏季は海水浴客で賑い、最近は県内各地は勿論県外からの浴客も年々増加している。従って設備も逐次整備されている。湾内での貝漁りや釣りも人気を呼んでいる。弘象山は長面入江の口に200mほど突出た高さ約40mの小丘である。波の音、鳥の鳴き声、発動機船のエンジンの音まで間近にきこえる静まの中にたたずまう。

眼下には長面海岸の汀と、3kmに及ぶ松原の緑したたる眺め、又遠く渺茫たる太平洋、並に三陸特有のリアス式海岸の眺望など、雄大にして且つ絶佳、まさに一幅の絵である。又海上に浮ぶ八景島始め數々の島々、そしてその岩に降ける白波、又遙かに遠く海岸に散在する色とりどりの北上町の民家のならびなど、その美しさは筆舌に尽し難い。この辺一帯は県立公園となっている。



弘象山から長面海岸をのぞむ (河北町 尾崎)



弘象山から長面の集落をのぞむ
(河北町長面、尾崎)

富士沼

位 置 河北町針岡地区（旧大川村），町の東約10km

概 説 周囲4km、面積約100Haにも及ぶ広大なもの。
水は田圃の用水に利用され、鳥類の棲息地となる。
とくに冬期は白鳥の飛来地として著名で、多い時
には数百羽も遊泳している。環境が静寂、勝景の
地でもある。



富士沼より硯上山を望む（河北町 針岡）

じょう　　ほん 上品山

位 置 河北町二俣地区、町の東南約5km

概 説 北上山地の高山、標高467.8mである。最近附近一帯は牧草地に造成され、緑一色におおわれている。山頂からの眺望は雄大で、南方眼下に石巻湾がひらけ、石巻工業港の船舶や、石巻市の市街地が手にとるようにのぞまる。東南には牡鹿半島や田代島、網地島、金華山が洋上に点々と浮ぶさま、西南は桃生、遠田の沃野、追川、江合川、鳴瀬川、北上川の長蛇の流れ、遠くは奥羽山脈が、そして北ははてしなく続く北上山脈の山波、これらの風景がパノラマの如く展開する。



上品山遠望（河北町三輪田）

けん　　じょう 硯上山

位 置 河北町大川地区、町の東

概 説 桃生郡第一の高山で標高582.2mである。山頂からの眺望は雄大で上品山からの眺めと優劣はつけがたい。ここからの眺望の特色は、三陸側リアス式海岸の眺めと、石巻湾方面、両方の眺望を擧げることができよう。将来、上品山、硯上山をつなぐ観光道路でもできれば、名実ともにブルースカイラインとして世に紹介されるようになるだろう。

八幡神社と亀ヶ森公園

位 置 河北町旧屋敷（旧飯野川町），町の中心部

概 説 飯野川町北側の丘陵上にあり、八幡神社（祭神は菅田別命、倉稲魂、菅原道真）拝殿の建築美と、公園の環境とがしつくり調和し、美しく且つ莊嚴である。公園地は眼下の北上川の清流とよく融和し、且つ眺望もよく、町民に親しまれている。境内は広く、稻荷神社、市神社の摂社が鎮座し、児童遊園地も附設され静穏な環境を形づくっている。又鳥獣保護区に指定されているので小鳥の鳴き声もさわやかである。園内には松、桜、椿、杉等の老木も多く、桜花爛漫の春、紅葉の秋には格別の賑わいを見せるのも故なしとしない。



八 檻 神 社 (河北町旧屋敷)



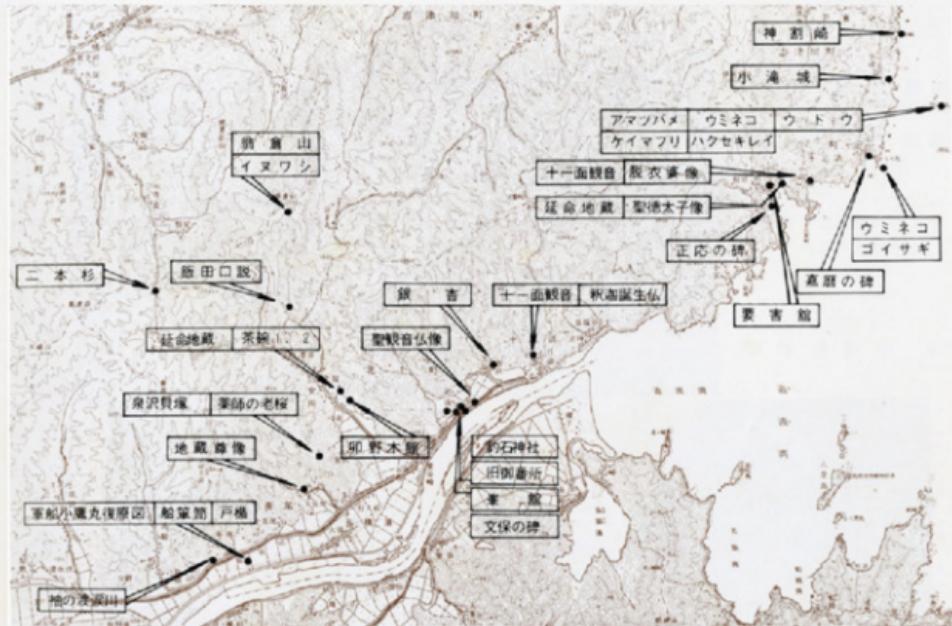
亀ヶ森公園より街なみをのぞむ (河北町旧屋敷)

北上町の部

神	社	128
古	碑	132
佛	像	133
埋 藏 文 化	財	137
器	物	138
古	木	140
交 通 史	跡	141
自	然	142
生	物	143
無 形 文 化	財	145

註 位置を表わす「町の北約〇〇km」或は「町の南
約△km」は、それぞれの町役場の所在地を基点
としての距離です。

北上町の文化財



神社

つるいし 釣石神社

位 置 北上町十三浜字追波(旧十三浜村)町の西南約2km

概 説 旧村社。勧請の年月は詳らかでないが、釣石の名称のいわれという巨石が二つある。往古より名謡として「封内記」その他旧記にしるされている。

古城峠館の東端に位置しており、旧御番所は境内地にある。



釣石神社 (北上町 追波)

卯野木館跡

位 置 北上町女川字石神(旧橋浦村), 町の西約4km

概 説 風土記御用書出によれば, 千葉雅樂之助(葛西の家臣)の居城という。縱121間, 橫20間とあり, 造構は往昔そのままである。



卯野木館址 (北上町 女川)

峯 館 跡

位 置 北上町十三浜字追波(旧十三浜村), 町の西南約2km

概 説 安永年間の風土記書出によれば高さ33間, 南北250間, 東西101間, 館主, 年代とも不詳とあるが, 峰館西南500米にある山居寺跡よりの出土品等よりすれば, 平泉藤原系の日爪五郎季衡と関連あるものと考えられる節がある(日爪五郎季衡は町内月浜高小屋主)。

北上川口を俯瞰する要衝の地にある。



峯 館 址 (北上町 追波)

要害館址

位置 北上町十三浜字相川（旧十三浜村），町の東北9km

概説 相川浜の西部，小学校（南面）と中学校（北面）の間にまたがる山地に要害館の跡が見られる。標高約80mの頂上部に構えられたいわゆる山城の一種である。その面積は東西100m，南北300mにも及ぶ巨大なもので，南面が急峻であるが，北面はゆるやかな勾配となり，この面に壇が広々と展開する。要害館の特長を一言にして評すれば，相川湾に構えられた城館としてその天嶮の面，眺望の面ですぐれた条件を具备していると言える。中でもこの要害館を本拠として，小泊館，小指館など大小の支城（伝城）が衛星状に相川湾の南北一帯に分布するさまは，注目すべき偉容と言えよう。

「風土記」には東西23間，南北30間（本丸のみ）との記録がある。要害館の館主は確かではないが，繁栄の時代は中世末期と考証されている。

館跡は今はすべて細地と変わった。



要害館址（北上町 相川）



要害館の支城 (北上町 小瀧)

小瀧城跡

位置 北上町十三浜字小瀧（旧十三浜）、町の東北約12km

概説 小瀧城址は現在の小瀧公民館前にあり、頂上部に立つと右に牡鹿半島から北上川河口が、左には志津川湾から遠く唐桑半島が一望できる要衝の地である。現在も空堀等がそのまま残っている。館主は武山七郎左衛門と伝えられている。



小瀧城址 (北上町 小瀧)

古 碑

文保の碑

位置 北上町十三浜字追波（旧十三浜村），町の西南
約2km

概説 右志者過去聖靈為往生
文保三年己未六月二十四日（1319年）

極樂乃至法界平等利益也

高さ 1.3m、巾 0.45m、厚さ 0.4m

註 旧番所附近崖下にある。



文保の碑（北上町 追波）

嘉曆の碑

位置 北上町十三浜字大指（旧十三浜），町の東北
約10km

概説 □□□□三悪道

右志者過去先妣□離□

し嘉曆二年九月八日四十八日結願會敬白（1327年）

□往生極樂□□平□故也

□造立者□□成菩提

高さ 1.5m、巾 1.2m、厚さ 0.25m

註 大指海岸近くの明林寺廃寺跡にある。



正応の碑（北上町 小泊）

正応の碑

位置 北上町十三浜字小泊（旧十三浜），町の東北
約8km

概説 正応三年十月廿五日（1290年）
高さ 1.2m、巾 0.5m、厚さ 0.2m

嘉曆の碑（北上町 大指）



佛 像



地 蔵 菩 薩 像 (北上町 長尾)

木造地蔵尊坐像

位 置 北上町橋浦字長尾、長泉寺（旧橋浦村）

町の南西約6km

外 観 木造、像高（33.5cm）

時 代 室町時代（1400年代）

作 者 不明

註 大日如来と伝承される。

延命地蔵像 (北上町 女川)



木造延命地蔵坐像

位 置 北上町女川、江林寺（旧橋浦村）

町の西約4km

外 観 木造、像高（28cm）

時 代 室町時代中期（1478年頃）

作 者 栄尊

註 座裏銘に、時文明十念九月二十二日、
栄尊^玄とあり。別名くろから地蔵ともいわれ、
古くから子供の夜泣き^{ハラハラ}の虫に靈験あらたかなもの
で尊信があつい。

木造十一面觀音坐像

位 置 北上町十三浜字月浜長觀寺（旧十三浜村）、町の中心部
外 観 一本造、像高（47.5cm）
時 代 室町時代初期（1400年頃）
作 者 風土記御用書出によれば、徳市菩薩作と伝えられる。
註 北上町十三浜字吉浜、江沢寺の本尊であるが明治年間火災のため本堂及び其の他の附属建造物炎上し、以降隣接部落月浜長觀寺に移し、今にいたる。鎌倉風宝町初期の秀作。



十一面観音像（北上町 月浜）

聖観音像（北上町 追波）



木造聖観音立像

位 置 北上町十三浜字追波（旧十三浜村）、町の西南約2km
外 観 木造、像高（24cm）
時 代 室町時代（1400年代）
作 者 不明
註 塚館下の旧船宿に伝わっていた秘仏といわれる。地方作。

しやかたんじょうぶつ
銅造釈迦誕生仏

位 置 北上町十三浜字月浜、長觀寺（旧十三浜）、町の
中心部

外 観 銅造、像高（17.3cm）

時 代 室町時代初期（1400年頃）

作 者 不明

註 腰下たがね彫り、台座の裏に、めぐり墨書が見え。
墨書銘（山十□ト口上）とあるが意味不明。



木造延命地蔵立像

位 置 北上町十三浜字相川地福寺（旧十三浜村）、町の
東北約9km

外 観 一本木、像高（32cm）

時 代 室町時代中期（1400年代）

作 者 不明

註 詔佛として地福寺本堂にある。当時の作風の特徴
として、梅の紋が襷模様に配してある貴重な資料。

誕 生 仏 像（北上町 月浜）



延 命 地 藏 像（北上町 相川）

木造聖德太子像

(持蓋太子)

位 置 北上町十三浜字相川地福寺（旧十三浜村）、町の
東北約9km
外 観 一木造、像高（7.5cm）
時 代 室町時代中期（1500年代）
作 者 不明
註 脇仏として地福寺本堂にある。地方作。



聖徳太子像（北上町 相川）

木造十一面觀音坐像

位 置 北上町十三浜字小指觀音堂（旧十三浜村）、町の
東北約10km
外 観 桧材一木造 像高（72cm）
時 代 室町時代初期（1400年頃）
作 者 不明
註 觀音堂の本尊である。彩色は剥げ風化や虫害が見
られる。十一面のうち一面は脱落して無い。地方作と
思われるが優雅な像である。室町期にこの地を領
した阿部氏の守り本尊であり、近隣の人々の信仰厚
く、現在も阿部氏一族を中心とした部落契約会で保
存祭祀を行っている。

十一面觀音像（北上町 小指）



一木彫り込み、脱衣婆像

位 置 北上町十三浜字小指觀音堂（旧十三浜村）、町の東北
約10km
外 観 桧材一木造 像高（29cm）
時 代 鎌倉初期（1200年頃）
作 者 不明
註 觀音堂内にあり。彫眼、本喰五行風の乳形、秀抜な
のみ使いと、民芸的な風趣をもった愛さるべき作品。



脱衣婆像（北上町 小指）

埋蔵文化財

女川泉沢貝塚

位置 北上町女川泉沢（旧橋浦村）、町の西約4km

概 説 繩文期の貝塚、土器石器其の他出土品多数。出土品の代表的なものに土偶があり、少しの欠損もなく完全に原型をとどめている。

現在東京博物館に所蔵されている。

完全な形での出土は稀であるとされ、遮光器土偶、王冠土偶ともいわれ、中学二年社会科教科書に写真が掲載されている。

軍船小鷹丸復原図

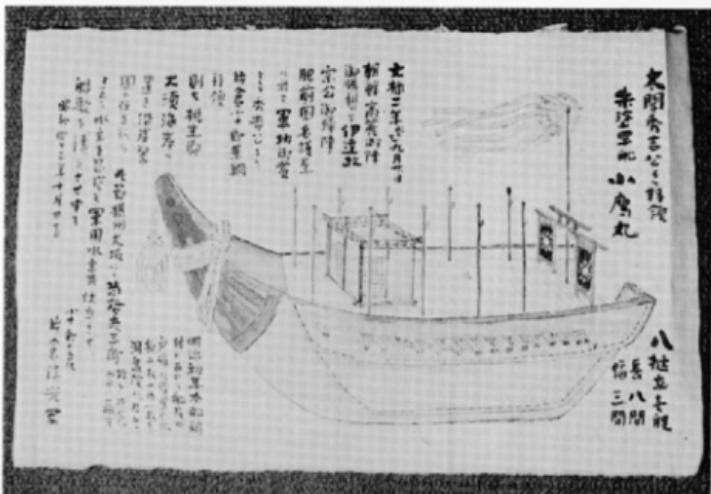
位置 北上町橋浦字大須洞泉院（旧橋浦村大須）
町の西南約7km

概説 文禄2年(1593年)3月豊臣秀吉朝鮮遠征の軍を派遣の際に使用した赤塗早船(朱塗軍船)を、片倉小十郎が秀吉より拝領、当時の北上川岸大須へ置き、本吉郡歌津崎迄の異国船整備に当らせた。平素は御假屋と称する家屋を建て、これに保管された。

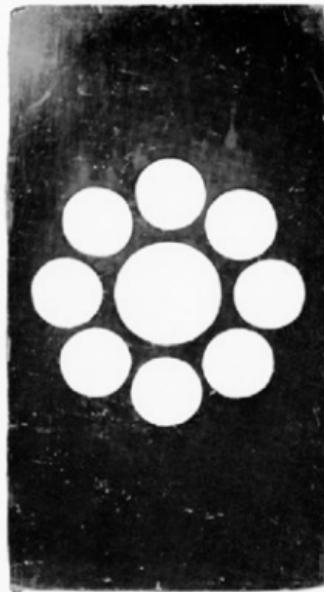
北上の流れに映える朱塗。桃山時代、秀吉の豪華軍船小鷦鷯丸の威容。^{さかね}艤に桐の金紋が印象的であったと語り伝えられているが、明治初年解体されたことは、惜しまれてならない。



泉澤貝塚（北上町女川）



器物



ふなたんす
船 章 簡

位 置 北上町橋浦字大須洞泉院(旧橋浦村大須), 町の西南約7km

概 説 幅37.5cm, 横32cm, 奥行42cm, 総桐。文禄2年(1593年)片倉小十郎景綱, 豊臣秀吉より拝領した軍船小鷹丸の船章筒(懸硯)として使用したものであるが, 抽斗を一つ失っている。船章筒としては初期のものである。

戸

櫃 (北上町 大須)



船 章 簡 (北上町 大須)

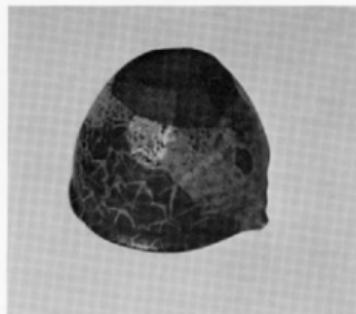
茶碗 I

位置 北上町女川江林寺（旧橋浦村），町の西約4km

武山梅玄氏所藏

作者 初代清水六兵衛，寛政年間の人，糸尻に嵯峨天

龍寺桂洲和尚の印がある。



茶碗 I (北上町 女川)

茶碗 II

位置 北上町女川江林寺（旧橋浦村），町の西約4km

武山梅玄氏所藏

作者 鎌屋喜兵衛，文化初期の人。京都栗田錦光山焼。



茶碗 II (北上町 女川)

古木

その1 薬師の老桜

「吉野桜」

位置 北上町女川字泉沢(旧橋浦村), 町の西約4km
泉沢貝塚薬師地内。

樹令 約280年前女川村領主板田出雲が植えたという。
(元禄年間)根回り6m, 地上1.5mの径1.8m, 樹高約
25m, 枝張り東西約36m, 樹勢は盛んで, 開花
時の壯觀は近隣に其の比を見ない。

その2 女川の二本杉

位置 北上町女川字大峯(旧橋浦村), 町の西約8km
津山町横山南沢との境界。

樹令 約800年といわれ, 右を太郎, 左を次郎といい,
太郎の根回りは約7m, 地上1.5mの径2m, 樹高25m。
次郎の根回り約6m, 地上1.5m径1.5m, 樹高20m, 古
くから近郷唯一の名木で, 遠く登米, 桃生, 遠田方
面からも望み見られる。

古木その2 二本杉 (北上町 女川)



古木その1 老桜 (北上町 女川)

その3 吉浜のイチョウ

位置 北上町十三浜字吉浜, 能野神社境内(旧十三浜
村), 町の西約1km

樹令 約500年, 根回り6m, 地上1.5mの径約1.5m,
当地方稀にみる巨木である。雌雄二本あるうちの
雄で, 雌は根元の周囲約3mに満たない。

古木その3 イチョウ (北上町 吉浜)



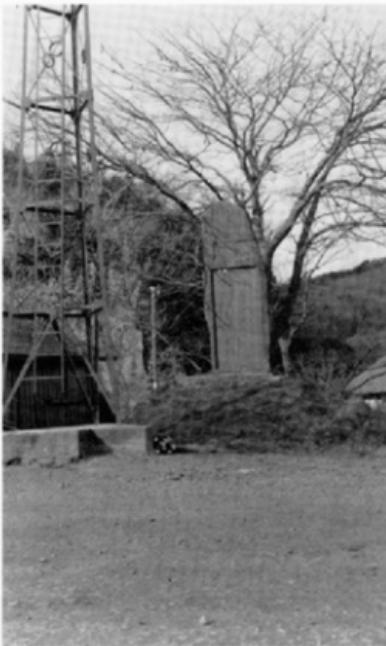
交通史跡

旧御番所跡

位置 北上町十三浜字追波（旧十三浜村）、町の西南
約2km

概説 旧北上川に残る唯一の御番所跡である。

河川改修により景観は変っているが、見張台は釣石神社境内地内にあり、その名残を止めている。伊達藩政時代、北上川口の取締り監視を司り、又外国船渡來の監視所としても重要な任務をもっていた。



袖の渡り、涙川

位置 北上町橋浦字本地（旧橋浦村）、町の西南約9km

概説 河川改修のため往昔の面影は止めていないが、
次の古歌が残っている。

相模（新後撰拾遺集）

みちのくの袖の渡の涙川、ものうちになかれてそ
すむ。

行家（もしは草渡部）

なみた川あきき瀬そなき陸奥の、そてのわたり
に瀬はあれとも。

冷泉院從二位為久（仙台領名歌集）
ほしあへぬ露たに憂きを旅衣、袖の渡のなみに
ぬらしな。



袖の渡り、涙川（北上町 本地）

旧御番所跡（北上町 追波）

自 然

おきな ぐら やま
翁 倉 山

位 置 北上町女川（旧橋浦村），町の西北約7km

概 説 標高532.4m，桃生郡，本吉郡の境界にあり，古来郡内の名山として知られている。遠く牡鹿半島，本吉の岬を望み，江の島，金華山，松島も一望のうちにおさめることができる。

遙かに栗駒が見え，奥羽の連山がかすむ。頂上に石造の翁倉神社があり，古来旱魃時の雨乞に靈験ありと伝えられる。山中にイヌワシの営巣繁殖地があり，亜高山帯植物の群落もある。



翁 倉 山 (北上町 女川)

神 割 嶺 (北上町 石生)

かみ わり ざき
神 割 嶺

位 置 北上町十三浜字石生（旧十三浜村），町の東北約12km

概 説 本吉郡志津川町戸倉寺浜との境。

松の自然林と，鋸歯状に錯綜したアス式海岸線。伝説のまつわる断崖奇勝。海水の澄明と太平洋の怒濤とが相まって南三陸独自の勝れた海洋美を形つくる。

遠景は，南に数多くの海鳥の繁殖地双子島や，はるかに牡鹿半島の島々を望み，北は志津川湾から泊半島，そして氣仙沼大島も眺望できる。又この地内には県指定のキャンプ場もある。



生 物

翁倉山のイヌワシ繁殖地

位 置 北上町女川翁倉山（旧橋浦村）、町の西北約7km

概 説 昭和40年5月12日天然記念物に指定をうけた
イヌワシ（わしたか目・わしたか科）は、両翼長
2.3mに達する雄大なワシで、日本にはまれな種
類である。

女川側南斜面姫小松の樹上に巨大な巣をつくる
点、特異な営巣といわれている。

現在雌雄二羽棲息、毎年一羽ないし二羽繁殖し
ているが、成鳥と同時に親鳥の棲息圏外に親鳥に
よって放逐される。

野兎、山鳥、雉子などを捕食し、稀に人家近く
の子犬などをさらうことがある。

古老の談話によれば、昔から棲息したという。極
めて貴重な学術的資料である。

県庁舎内にあるイヌワシの剥製は、石巻市牧山に
於いて狩人の獵犬に襲いかかり、うたれたものであ
る。

イヌワシその1（飛しようとするイヌワシ）（北上町 翁倉山）



イヌワシその2（ひなに餌をやるイヌワシ）



イヌワシその3（樹上のイヌワシ）



ウミネコ・ゴイサギ・ケイマフリ・
白セキレイ・アマツバメ・ウトウ・
繁殖地。

位 置 北上町十三浜字大指、小瀧（旧十三浜）

町の東北約11km

概 説 大指海岸近く鞍掛島、松島はウミネコ、ゴイサギの繁殖地であり、共棲しているのが珍しい。洋上の双子島はウミネコ、ウトウ、ケイマフリ、白セキレイの繁殖地としての南限であり、アマツバメの繁殖地でもある。

繁殖期はいずれも5月から7月で、春の彼岸になると、これらの島々に渡来し、7月から8月になると島を飛び去る。

ウミネコは魚類の来集を知らせるので漁獲上、益鳥とされ、古くから地方の漁師はこの鳥を保護している。



ふたごじま
ウミネコの乱舞 遠くに見える島は双子島
(北上町)



くらかけじま すのめじま
鞍掛島と跨島

無形文化財

はんべん 飯田（女川）口説

位置 北上町女川（旧橋浦村）、町の西4km

概説 宝暦2年（1752年）春、女川村に発生した飯田事件、つまり領主飯田能登の妻、於節と、用人の日塔喜右衛門の密通事件。そして主君（能登）の殺害事件——これは仙台藩犯罪史上その例を見ないものとして大きな話題を呼んだ。飯田口説は後年（江戸末期か？）。この於節、喜右衛門の悲恋物語をテーマに創作された当地特有の口説である。「口説」とは、ある物語りを独特的の節まわしで唄い口演する一つの芸能であった。しかし、今や県内

でも口説と称された芸能はすべて姿を消してしまった。当地に伝わる飯田口説もまた、数人の老人たちにより、かろうじて命脈を保っているに過ぎず、消滅寸前にある。

なお、被害者飯田能登の墓は女川部落の江林寺内にあるし、於節、喜右衛門が処刑された七北田刑場あと（現・泉市）には、供養のため寄進された「お節地蔵」が現存している。



飯田屋敷あと（北上町 女川）

口説の台本（北上町 女川、千石氏所蔵）



編集後記

高速道路が先か、史跡が先か？その優位性について最近しばしば物議がかもされているようです。だが、その価値論は別として、少なくも手続きのルールだけは明瞭であります。『保護』が第一に、「建設」をその次に、とする簡明なルールが即ちこれです。ところが為政者の間においてすら、案外とこの基本路線を踏みちがえている向きが多いようで、寒心に堪えません。

文化財とは一体、現代の人が自由にできるものなのでしょうか？一考を要するところです。

文化財は過去と現代の人々をつなぐ、そして現代から未来の人々との間の架け橋としての、特殊な使命を帯びた遺産であるのは言うまでもありません。おそらく現代の人々が単純な感覚で、思いのままそれを扱うとしたら、「生きる者のおごり」として、悔いを永久にのこすことにもなりかねないでしょう。

一見つまらなさそうな石碑や、仏像にも、数百年にわたる人々の祈りや執念がこめられているのに心してほしい。そして私達は「古いもの」に対しては、必要以上の慎重さ、謙虚さをもってのぞみたいものです。

本書をごらんになって、わが郷土の史跡、文化財の如何に多く、明暁な自然が如何に豊かであったかにお気づきのことと思います。

みちのくの蝦夷平定とか、平泉文化にかかる古代資料から、葛西氏や山内首藤氏など地方豪族の興亡を物語る中世資料、そして伊達家の統治にかかる、いわゆる江戸期のものまで、資料的にみてもその年代の巾はひろく、その数も豊富なものでした。これは「北上河口」と言う恵まれた地理的環境にもよりますが、ともあれ、わが郷土が他に誇るべき大きな歴史的背景をもち、価値ある文化遺産を保持し得たのは、特筆すべき事実であって、郷土にとって大きな幸運でした。

本書は皆さんに、わが郷土の有形無形の文化財、史跡、自然美などの概要を知っていただくために、換言すれば文化遺産の実態を認識いただくために、企画、製作された皆さんの本です。

どなたにも解りやすく、親しめるようにと、説明も簡略にし、写真を多くとり入れ、いわば「写真集」のように編集してみました。

中には初公開の神像、秘仏、宝物などが沢山入っております。どうぞ本書の取扱いと保存には、細心の注意をもってするよう、くれぐれも願いたいものです。

なお、集録の範囲ですが、諸般の事情により不本意ながら惜しい資料をかつあいせざるを得ない向きも多々ありました。例えは、「古碑」については南北朝初期を以て、「仏像」については製作年代を室町時代までにしほり、以降のものはカットしたなどがこれです。皆さんの意に満たない点は更に次回の二集、三集で以て精緻なものとしてお応えすることでご了承下さい。本書が郷土の皆さんに親しく読まれ、ひいては精神文化の一資として役立つことになれば、たいへんうれしく思います。

昭和47年夏

宮城県飯野川高等学校にて

紫桃正隆
(編集委員)

ふるさとの文化財

昭和47年7月

編 集 河北地区文化財保護委員会

宮城県桃生郡河北町相野谷字飯野川町121

発 行 河北地区教育委員会

宮城県桃生郡河北町相野谷字飯野川町121

印 刷 株式会社 針 生 印 刷

仙台市伊在(印刷団地3号)

■ (0222) 88-5011 代

製 本 株式会社 中 山 製 本 所

仙台市伊在(印刷団地22号)

■ (0222) 88-5381 代

非 売 品